

## “Cool heads but warm hearts.”

### - マーシャル研究序説：ケインズとの関連で -

村 本 孜

#### <目次>

#### 0. はじめに

#### 1. マーシャル (Marshall, A.) の言葉

[1.1] ケインズの『人物評伝』の中のマーシャル

[1.2] ケンブリッジ大学教授就任講演(1885年2月24日)

#### 2. “Cool heads but warm hearts.” をめぐって

[2.1] 異説

[2.2] 林敏彦 [2007] の紹介

[2.3] 矢野誠 [2012] の指摘

[2.4] 望月正光 [2009] の論

#### 3. 「経済騎士道」との関係で

[3.1] 根井雅弘 [1995 (2001), 2006, 2009] の「経済騎士道」としての理解

[3.2] 「経済騎士道」と協同・協同組合

[3.3] “Captains of Industry” - 「経済騎士道」のコンテキストで -

#### 4. ケインズのマーシャル批判

[4.1] ケインズ『一般理論』のドイツ語・日本語版序文

[4.2] ハロッド (Harrod, R.) の指摘

#### 5. ケインズ理論の理解のために

[5.1] “In the long run we are all dead.” - ケインズ理論の理解との関連で -

[5.2] ケインズ『一般理論』の最終章

[5.3] ケインズの最後の論文 “The Balance of Payments of the United States” (1946)

#### 6. おわりに

[参考文献]

## 0. はじめに

見過ごしてはいるが気になる表現や言葉がある。その一つは，“One for all, all for one.”（一人は万人のために，一人は万人のために）であるが，生命保険や協同組織の研究には常套句として登場し，その言葉の由来などについて種々の論があることについては村本 [2014] で考察した。マーシャルの有名な “Cool heads but warm hearts.” やケインズの “In the long run we are all dead.”，シュマッハーの “Small is beautiful.” など一度は詳しく調べてみたいと思う文言である。

本稿では，マーシャルの有名な “Cool heads but warm hearts.” を取り上げる。経済に関するものにとっては無論のこと，福祉・災害復興をはじめ人間に関する種々の局面で注目される名言である。有名であるだけに，その評価や解釈にも種々の論がある。また，ケインズの “In the long run we are all dead.” についても，若干の私見を示した。

## 1. マーシャル (Marshall, A.) の言葉

### [1.1] ケインズの『人物評伝』の中のマーシャル

凡そ経済学を学ぶ者であれば周知の “Cool heads but warm hearts.” は，アルフレッド・マーシャル (Marshall, A.) の言説として有名である。この言葉は，ケインズ (Keynes, J. M.) が，*Essays in Biography*, 1933. (『人物評伝』)<sup>1)</sup> のマーシャルの章で紹介したことから，広く知られるようになったといわれる。ケイ

1) 邦訳は，『人物評伝』（熊谷尚夫・大野忠男訳，岩波現代叢書，1959年7月）で，ジョフリー・ケインズ（メイナード・ケインズの弟）の編になるものが底本とされ，初版所収分に3編の論稿（ジェボンズ，ニュートン，マーシャル夫人）が追加されている1951年版の翻訳である。*Collected Writings of John Maynard Keynes* Vol. X, 1972. 『ケインズ全集第10巻』（大野忠男訳，1980年）も同じ書名であるが，1933年版・1951年版に比べると相当の追加がなされている。政治家の部分ではハーバート・アスキス，アーサー・バルフォア，レジナルト・マケナ，経済学者の部分ではフォックスウェル，カニンガム，ヒッグズ，ホーアが追加され，その他第3部（「小編人物素描集」で8人），第4部（「キングズ・カレッジの友人たち」で6人（1933年版にあるラムゼーも含むので，追加は5人），第5部（「2人の科学者」では1951年版にある「人間ニュートン」に加えて，バーナード・ショー，アインシュタインを追加）と大幅な追加があり，さらに第6部（「回想録2編」）として「敗れた敵，メルヒオル博士」と有名な「若き日の信条 *My Early Belief*」が収録されている。

ンズは、マーシャルの愛弟子で、やがて師と袂を分かち独自の「ケインズ経済学」を打ち立てることになるのだが、マーシャルに可愛がられたケインズは、『人物評伝』の中で彼のことを次のように評した。

「説教者としてまた人間の牧師としてまた人間の牧者として、彼はほかの同様な人物よりも格別すぐれていたわけではない。しかし科学者としては、彼はその専門の分野において、100年間を通じて世界中でもっとも偉大な学者であった。にもかかわらず、彼自身好んで優位を与えようとしたのは、彼の本性の第一の側面であった。この自我こそ主人であり、第二の自我はしもべでなければならない、と彼は考えた。第二の自我は知識のために知識を求めた。第一の自我は抽象的な目的を実際的な進歩の必要に従属させた。驚のような鋭いまなこことあまがけるつばさとは、道を説く人のいいつけに従うためにしばしば地上によび返された。」<sup>2)</sup>

このようにケインズは、マーシャルを偉大な学者として『人物評伝』の初版で取り上げた経済学者4人の中に入れている<sup>3)</sup>。マーシャルは、ケンブリッジ大学を卒業後、ケンブリッジのセント・ジョンズ・カレッジで講師となり、一

---

2) 熊谷・大野訳 [1959] pp. 135~136. *Collected Writings* Vol. X, p. 173, 『全集第10巻』大野訳 [1980] p. 232。

3) ほかは、ケインズが自らをその学問上の流れを汲むとしたマルサス (Malthus, R.)、そしてエッジワース (Edgeworth, F. Y.)、ラムゼー (Ramsey, F. P.) である。ケインズがマルサスの流れを汲む点は、『一般理論』の「日本語版への序」(1936年12月4日)で、「私はリカードではなくてマルサスの系統に属するこの書物が、少なくとも一部の人々からは共感をもって受け入れられるのではないかと考えている」(塩野谷九十九訳 (1941年12月) p. 6. *Collected Writings* Vol. VII, 1973, p. xxiv, 『全集第7巻』塩野谷祐一訳 (1983年12月) p. xxiv) と書いていることで明らかである。山形訳は「これはリカードよりはマルサスの流れをくむ本書が、少なくとも一部で好評をもって迎えられのではという希望を抱かせてくれるものではありません。」(山形 [2012] p. 41) である。

また、ケインズがマルサスを評価した点について、根井 [1990] は次のように書いている。「ケインズが、「経済学上の議論については、リカードは抽象的で先駆的な理論家であり、マルサスは帰納的かつ直感的な研究者で、事実ならびに自分自身の直感に準拠して吟味しうることからあまり遊離することをひどく嫌ったのである」と書いた意味も少し明らかになってきたようだ。こうして、ケインズは、経済学方法論においてマルサスに親近感を持っていたこと、そしてマルサスが有効需要の不足から失業が生じることを議論していたと信じたため、マルサスをきわめて高く評価するようになったのである。

もしかりにリカードではなくマルサスが、19世紀の経済学がそこから発した根幹をなし、てさえしたならば、今日世界はなんとほかに賢明な、富裕な場所になっていたことであろうか! (Keynes, J. M., “The General Theory of Employment,” *QJE*, Feb. 1937, reprinted in *Collected Writings* Vol. XIV, pp. 109~123) (p. 43)

時オックスフォード大学に奉職するが、1884年11月にヘンリー・フォーセツトが死去すると、1884年12月にケンブリッジ大学の政治経済学教授に選出され、翌1885年の1月にケンブリッジへ戻り、2月には教授就任講演を行なった。ケンブリッジでは、経済学のための新しい学科の創設に努力し、1903年に漸く実現した。この時まで、経済学は歴史と道徳科学の課程の下で教えられており、経済学に精力的で専門化された学生達がマーシャルの望むようには育ちにくい環境にあった<sup>4)</sup>。

## [12] ケンブリッジ大学教授就任講演（1885年2月24日）

このような事情の中で、1885年2月24日、就任講演「経済学の現状 (The present position of economics)」を行なった (an inaugural lecture given in the Senate House at Cambridge, 24 February, 1885)。その最後の締め括り部分で、周囲の社会的な苦難に取り組むために冷静な頭脳をもって、しかし暖かい心情をもって (cool heads but warm hearts) 進んで力を差し出す者をより多数、ケンブリッジが世に送り出すよう微力ながら全力を尽くすことが自分の志である旨を述べている。すなわち、

「たくましい人たちの偉大な母であるケムブリッジが世の中に送り出す、冷静な頭脳とあたたかい心情をもち、彼らをとりまく社会的苦悩と取り組むためにその最善の能力のすくなくとも一部を進んで捧げようと志し、上品で高尚な生活のための物質的手段をすべての人に開放することがどこまで可能であるかを明らかにするために、力の及ぶかぎり努力しないうちはけっして満足に甘んじることのないようにと決心した、そういう人たちの数をいっそう多くしようと、乏しい才能と限られた力とをもってわたくしにできうるだけのことをするとい

4) ケインズは『人物評伝』の中で、「3 最後にケムブリッジ大学経済学コースの創設によせたマーシャルの尽力がある」(熊谷・大野訳 [1959] pp. 184~188。 *Collected writings* Vol. X, pp. 220~225, 『全集第10巻』大野訳 [1980] pp. 292~297) としてその経過を紹介している。経済学に関する試験問題はモラル・サイエンスと歴史学の双方のトライボス（優等卒業試験）に含まれていた制度を、マーシャルの尽力によって「1903年に、経済学およびこれに関する政治学の部門に別個なコースと優等卒業試験が創設されること」になり、「正式な意味で、マーシャルはケムブリッジ大学経済学科の創設者であった」(熊谷・大野訳 [1959] p. 186。 *Collected Writings* Vol. X, pp. 220~225, 『全集第10巻』大野訳 [1980] pp. 294~295) のである。これ以外に、重要な運動に関ったものとして英国経済学会（王立経済学会 Royal Economic Society）の設立、ケンブリッジにおける婦人の学位取得問題がある、とケインズは指摘した(熊谷・大野訳 [1959] p. 182。 *Collected Writings* Vol. X, pp. 218~219, 『全集第10巻』大野訳 [1980] pp. 289)。

“Cool heads but warm hearts.”

うのが、わたくしの胸中固く期している念願であり、また最高の努力でありましょう。」<sup>5)</sup>(下線部：筆者)

原文は、

It will be my most cherished ambition, my highest endeavour to do what with my poor ability and my limited strength I may, to increase the numbers of those, whom Cambridge, the great mother of strong men, sends out into the world with cool heads but warm hearts, willing to give some at least of their best powers to grappling with the social suffering around them; resolved not to rest content till they have done what in them lies to discover how far it is possible to open up to all the material means of a refined and noble life.<sup>6)</sup>(下線部：筆者)

また、永澤越郎訳 [1991] では、以下の通りである。

「私がもっとも深く心に期しておりますことは、またそのためにもっとも大きな努力を払いたいと思っておりますことは、すぐれた人々の母でありますケンブリッジで学ぶ人々の間から、ますます多くの人々が、私たちの周りの社会的な苦難を打開するために、私たちの持ちます最良の力の少なくとも一部を喜んで提供し、さらにまた、洗練された高貴な生活に必要な物的手段をすべての人が利用できるようにすることがどこまで可能であるかを見出すために、私たちに出来すことをなし終えるまでは安んずることをしないと決意して、冷静な頭脳をもって、しかし暖かい心情をもって、学窓を出て行きますように、私の才能は貧しく、力も限られてはありますが、私にできるかぎりのことをしたいという願いに外なりません。」<sup>7)</sup>(下線部：筆者)

このように、“Cool heads but warm hearts.” は、1885 年 2 月の教授就任講演で発せられたのである。

---

5) 熊谷・大野訳 [1959] p. 188. *Collected writings* Vol. X, pp. 224~225. 『全集第 10 巻』大野訳 [1980] p. 297.

6) “The present position of economics : an inaugural lecture given in the Senate House at Cambridge,” 24 February, 1885, by Alfred Marshall, London, Macmillan and Co., 1885, p. 57. *Collected Writings* Vol. X, pp. 224~225.

7) “The present position of economics” in Pigou [1925] p. 174, 永澤越郎訳 [1991] p. 31.

## 2. “Cool heads but warm hearts.” をめぐって

### [2.1] 異説

“Cool heads but warm hearts.” は、先の教授就任講演でのものという説のほか、マーシャルが、ロンドンの貧民街にケンブリッジの学生たちを連れて行き、「経済学を学ぶには、理論的に物事を解明する冷静な頭脳を必要とする一方、階級社会の底辺に位置する人々の生活を何とかしたいという温かい心が必要だ」と論じたという説もある。すなわち、学問を究めるにしても、仕事を極めるにしても、冷静な頭脳は欠かせない。しかしそれ以上に必要なものが、人間性である。特に人々を牽引するような立場の人間には、より一層の常識、正義感、道徳、そして暖かい心が備わっていなければならない、ということを論じたというものである。根井は「マーシャルの晩年の回想によれば、友人の勧めで J・S・ミルを読んだ後、彼は幾つかの都市の貧民街を訪れ、ヴィクトリア朝のイギリス最盛期の陰に隠れた貧困の実態を目の当たりにした。そして、「そのあと、私は経済学についてできるだけ徹底的な研究をしようと決心した」という。」と書いている<sup>8)</sup>。マーシャルの経済学の研究の出発点は、貧困問題の原因探求にあったのである。

当時のイギリスは、後発資本主義国であったドイツやアメリカに追いつかれつつあったとはいえ、広大な植民地を抱えており、経済的な覇権を握り続けていた。しかし、繁栄の裏側には、スラム街に生活する貧しい労働者が数多くいた。貧困の解決はマーシャルにとって重要な研究課題であった<sup>9)</sup>。マーシャルのこの言葉は、当時主流の経済学は、価値判断を免れた「資源配分の科学」であるということへの批判で、マーシャルにとって、貧困をいかに解決できるかという価値判断を含む問題は経済学の中心におかれるべき課題であった。少な

---

8) 根井「A. マーシャル 『人間の研究』としての経済学」日本経済新聞社編 [2001.7] p. 71。ケインズの『人物評伝』では、マーシャルの晩年の精神史の回顧の中で、「わたくしは物質的安楽の不平等よりも、むしろ機会の不平等が妥当であるかどうかについて疑惑をいだいた。それから、休暇中にわたくしはいくつかの都市のもっとも貧困な地区を訪れて、もっとも貧しい人々の顔を見ながら次々に街路を歩いてみた。そのあと、わたくしは経済学について徹底的な研究をしようと決心した。」と記されている(熊谷・大野訳 [1959] p. 133, *Collected Writings* Vol. X, p. 171. 『全集第 10 巻』大野訳 [1980] p. 229)。

9) 美濃口 [1992] pp. 8~11。

くとも、マーシャルにとっての経済学は、“Cool heads but warm hearts.”を持って、繁栄するヴィクトリア朝の裏面から目をそらすことはなく、経済の担い手である企業者や資本家たちに社会的責任を果たすべく「経済騎士道」を要求したのである。

## [2.2] 林敏彦 [2007] の紹介

林敏彦は、日本経済新聞の「やさしい経済学 名著と現代」でマーシャルを取り上げ（2007年3月27日）において、以下のように記している。

「近代経済学の形成に大きな影響を与えた英国の巨人、アルフレッド・マーシャル（1842 - 1924年）を語るには、「クールヘッド」「ウオームハート」という彼の言葉からはじめねばならない。この言葉はケンブリッジ大教授に選出された彼の、「経済学の現状」と題する就任公開講義（1885年）に登場する。ここでマーシャルは経済学研究の重要性、緊急性を強調したうえで、先人の業績、とくに経験に重きを置くドイツ歴史学派に敬意を払いつつ、自らの経済学者としての姿勢を開示した。

門下のケインズが後年著した『人物評伝』（大野忠男訳）によると、そのむすびでマーシャルは、基本姿勢のひとつとして「ケンブリッジが世の中に送り出す、冷静な頭脳と温かい心情を持ち、彼らを取りまく社会的苦悩と取り組むためにその最善の能力の少なくとも一部を進んで捧（ささ）げようと志し、……そういう人たちの数をいっそう多くしようと、乏しい才能と限られた力とをもって私にできうるだけの事をする」と強調している。

冷静な頭脳と温かい心情の持ち主を育てたい、と述べたわけだが、彼はヴィクトリア朝大英帝国のエリートたるケンブリッジ大生に、いわゆるノブレスオブリージュ（高い身分に伴う義務）を説いたとも言えよう。そして、「社会的苦悩」を語る裏には、理論の現実への適用を重視する彼の哲学と、人々の生活水準の向上にとどまらず、人間と経済社会そのものの進歩に対する彼の切実な希求があり、この主旋律は主著『経済学原理』をも貫いた。

講演におけるこのメッセージは、実は政治経済学への偏見が根強いケンブリッジの学者社会にも向けられていた。哲学など伝統的学問と比べれば歴史も浅く低俗なものとの見方がそこでは支配的だったからだ。新しい理論的發展を当時の貧困問題の克服などに役立てようとするマーシャルの姿勢にも彼らは総じて冷たかった。

ピグーやケインズらを育てのちにケンブリッジ学派（狭義の新古典派）の祖とよばれるマーシャルの闘いは、経済学の地位向上への闘いでもあった。そして、その基本姿勢もまた、クールヘッド、ウオームハートだったのである。<sup>10)</sup>

この林の記述は、単に学生の育成という趣旨だけでなく、経済学を独立した学問分野として確立する姿勢を明確にしたものという解釈で、マーシャルの既成の学問領域への挑戦でもあったことを明確にしている。

### [23] 矢野誠 [2012] の指摘

矢野誠は同じく『日本経済新聞』の「やさしい経済学」の「危機・先人に学ぶ - マーシャル」(2012年6月19日～29日の9回連載)の初回(6月19日分)で「クールな頭 温かい心」と題して、以下のように記している。

「アルフレッド・マーシャル(1842～1924年)は英国の大経済学者で、新古典派と呼ばれる現代の経済理論の創始者の一人とされる。ケンブリッジ大学で教べんをとり、A. C. ピグーや J. M. ケインズなど、経済学をけん引した多くの弟子から大変に尊敬されていたことでも知られる。マーシャルの流れをくむ経済学者たちはケンブリッジ学派と呼ばれる一大学派を形成し、現代経済学の発展に大きな貢献をした。

「クールな頭、温かい心」というのはマーシャルの有名な言葉である。これは1885年、ケンブリッジ大教授に就任した際の記念講演で述べられた。しかし、有名であるがゆえに、意図と随分違って伝わっているように感じる。現代に生きる我々がマーシャルから何かを学ぶには、最初に彼の本当のメッセージに触れておくのもよいだろう。

「クールな頭、温かい心」は、経済学や経済政策に携わるものにとって不可欠の素養だとされる場合が多い。しかし、彼が伝えたかったのは安易なパターンリズム(父権主義)ではない。大学教授として、学生たちに「クールな頭」だけでなく「温かい心」も身に付けてもらい、卒業後、実業の場において、身の回りで起きている生活苦の解決に少しでも手を差し伸べようとする人たちを増やしていきたい、というのが彼の考えである。マーシャルの思想は、人間は誰もが利他的な心を持つ、という見方に支えられている。

当時、極貧にあえぐ人々がたくさんいた。そうした人たちが、より良い住居、より良い食事、より良い余暇を楽しむには、より大きな富を作りだし、その富

10) 日本経済新聞社編 [2007] pp. 172～174。



を適切に分配し、利用する必要がある。そのため、一人ひとりが冷静な判断に基づき生産活動に従事すると同時に、少しずつ利他性を発揮することが最も近道だというのが彼の考えである。

現代は当時と比べると、格段に豊かになった。といっても、一人ひとりが「クールな頭」と「温かい心」を持つことが、豊かで明るい経済を創出するために不可欠だということに変わりはないだろう。」<sup>11)</sup>

このように、矢野は、学問としての経済学を人間の利他主義に求めたとしている点を、マーシャルが強調していると論じた。この理解は、マーシャルがその主著『経済学原理』の冒頭で、「経済学は日常生活を営んでいる人間に関する研究である。それは、個人的ならびに社会的な行動のうち、福祉の物質的要件の獲得とその使用にきわめて密接に関連している側面を取り扱うものなのである。このようにして経済学は一面においては富の研究であるが、他の、より重要な側面においては人間の研究の一部なのである。」<sup>12)</sup>と記述して、彼が「経済的価値」だけでなく、「非経済的価値」にも考慮した点と平仄を合わせるものであろう。

---

11) 日本経済新聞社編 [2012] pp. 177~178。

12) Marshall, A., *Principles of Economics*, Macmillan, 1890, (Ninth ed. 1961) p. 1. 馬場啓之助訳『マーシャル経済学原理』p. 3。ケインズは、『人物評伝』の中で、この書物について、「マーシャルの『経済学原理』の書き方には、不用意な読者の気がつかないほど尋常ならぬものがある。それは煽情的にならないように、また強調も控え目にと、よほど苦心してある。その修辞はしごく単純で、飾りけのないものである。それはよどみのない、明快な流れをなして、経済学についてほとんど知ることがなくとも、聡明な読者を停頓させたりまごつかせたりする箇所はまれである。著者自身の側での新しさの主張とか、独創性の主張というものとはまったく見られない。他人の誤謬を指摘した箇所もめったになく、以前の高名な著者たちは、じっさいにはなんと言ったにしても、その言わんとしたところは正しくかつ道理にかなったことであったと考えざるをえないことが説明される。」(熊谷・大野訳 [1959] p. 174. *Collected Writings* Vol. X, p. 210~211, 『全集第10巻』大野訳 [1980] p. 279)と書いて、文体上の工夫をして入門書に仕上げたことを示した。さらに、「1890年にはすでにマーシャルの名声は噴々たるものがあり、『経済学原理』第1巻は待ち設けていた世におくり出されたのである。……その成功は即座で、間然とするところがなかった。……ジャーナリストたち(に)は、……それが経済思想の新時代を招来したことを認めた。「これはすばらしいことだ、」……新たな経済学が到来して、古い経済学、すなわち「個人を純粹に利己的で利欲的な動物と見、国家を単にそういった動物の集塊とみなした」陰鬱科学は去った、と『デイリー・クロニクル』は書いた」(熊谷・大野訳 [1959] p. 168, *Collected Writings* Vol. X, p. 204, 『全集第10巻』大野訳 [1980] p. 271)として、当時のマスコミでのマーシャルの『原理』に関する高い評価を紹介している。

[ 2 4 ] 望月正光 [2009] の論

望月正光は、千葉商科大学経済研究所の機関誌「CUC〔View & Vision〕No. 27（2009年3月31日）で、巻頭言「Alfred Marshall の言葉」を書き、先の永沢訳を引用した後で、以下のように記している。

「1885年2月24日、教授就任に当たって、周囲の社会的な苦難に取り組むために冷静な頭脳をもって、しかし暖かい心情をもって進んで力を差し出す者をより多数、ケンブリッジ大学が世に送り出すよう微力ながら全力を尽くすことが自分の志である旨を述べたものである。A. マーシャルは、冷静な頭脳と暖かい心情の持ち主を育てたい、と述べているのだが、その趣旨は、ヴィクトリア朝大英帝国のエリートたるケンブリッジ大生に、いわゆるノブレスオブリージュ（高い身分に伴う義務）を説いたとも言うことができる。そして、この言葉は、貧困という「社会的な苦難」を語る裏には、理論の現実への適用を重視する彼の哲学と、人々の生活水準の向上にとどまらず、人間と経済社会そのものの進歩に対する彼の切実な希求があり、主著『経済学原理』においても貫かれているのである。この言葉は、キリスト教の『聖書』に起源を持つことから、厳格な福音派の家庭に生まれ、父の厳しい教育の下で聖職者となるべく育てられた A. マーシャル自身にとっても、経済学を志すに当たってその礎となる言葉であったと推察できよう。

現在、アメリカの金融危機に端を発する 100 年に一度と言われる経済危機の下で、今後世界経済は多くの課題に直面することになるだろう。同様に、日本経済も自動車産業の生産減少に代表される「経済不況」と非正規労働者や新規採用者の削減による「失業増加」の問題を如何に解決するかが、最大の課題となると思われる。その時、A. マーシャルの言葉は経済の世界に身をおく者にとって自らの行動の指針となすべきものと言えよう。すなわち、経済論理という冷静な頭脳をもって、しかし国民全体の厚生最大化という暖かい心情をもって、多くの課題を解決することが、今まさに期待されているのである。」<sup>13)</sup>

望月は、現代の世界金融危機においても、マーシャルのこの言葉が持つ意味の重要性を示したものだといえよう。

---

13) <http://www.cuc.ac.jp/keiken/view/27/kantogen/index.html>（2013年3月30日アクセス）

### 3. 「経済騎士道」との関係で

[3.1] 根井雅弘 [1995 (2001), 2006, 2009] の「経済騎士道」としての理解

このように、マーシャルのこの“Cool heads but warm hearts.”は、多くの論者によって、マーシャル経済学のエッセンスとして紹介されることが多い。しかし、現代の経済思想研究者である根井雅弘は、マーシャルについて多くの論稿を書いているが、この言葉を明示的に取り上げることは少なく、もっぱら「経済騎士道」として捉えている。その中で、

「ケインズのマーシャル伝には、幾つかの誤った記述が含まれていることが現在では明らかになっているけれども、いま引用した文章（先の注2の文章：筆者記）以上にマーシャルの本質を突いたものは見当たらないと思う。

マーシャルは経済学者としては同時代の最も優れた頭脳の一人であり、1890年、満を持して『経済学原理』と題する名著を世に問うた。これは文字通り経済原論の本なのだが、やはりどうしても「説教者」としての彼の本性が至る所に顔を出すのである。例えば、「貯蓄の主な動機は家族愛である」<sup>14)</sup>とか、「有能な労働者と立派な市民は、母親が一日のうちのかなりの時間留守にする家庭からは生まれにくいように思われる」とか、なかには今日では問題となるような文章さえある。マーシャルの読者が、弟子たちを含めて彼に反発を感じたのは、単に学説や思想のくい違いからではないと思う。マーシャルの有名な言葉に「冷静な頭脳と温かい心」というのがあるが、これも二重の本性を図らずも表明したものではないだろうか。<sup>15)</sup>

と書いて、マーシャルの「冷静な頭脳と温かい心」をややシニカルに捉えている。ただ、前述のように、繁栄するヴィクトリア朝の負の側面から目をそらすことはなく、経済の担い手である企業者や資本家たちに社会的責任を果たすべく「経済騎士道」を要求したのが、マーシャルにとっての経済学であった点に関して、根井は“Cool heads but warm hearts”を明示的ではないが評価している。すなわち、

「マーシャル経済学は、ワルラスと違って、なかなか数学的モデルに置き換え

14) Marshall [1961] pp. 227~229. 馬場訳第2分冊 pp. 199~201。

15) 根井「A. マーシャル 『人間の研究』としての経済学」日本経済新聞社編 [2001.7] pp. 69~70。

られないところにその特徴が現われることがある。「経済騎士道」についての独自の見解もそうである。「経済騎士道」とは、企業家がその経済活動において「卓越」への願望を純粹に追求し、蓄積した富を進んで公益のために提供するような態度のことを指しているが、マーシャルは、それが「騎士道」と名づけられる理由をさらに詳しく説明している。……（中略）……マーシャルは、人間性は進歩するという信念をもっていたが、彼が生きていた時代においては、「経済騎士道」の精神がすべての人々に浸透しているとはとても言い難かった。……（中略）……たしかに、若き日のマーシャルは、社会主義者たちの「社会福祉に対する骨の折れる私心のない献身」を深く尊敬し、経済学研究の初期に社会主義関係の文献（カール・マルクスや F・ラサールなど）を読んだといわれているが、結局、社会主義の教えに与することはできなかった。なぜなら、社会主義の理想を実現するには「経済騎士道」の精神が必要なのだが、それはいまだに人々のあいだに浸透していなかったからである。それゆえ、彼は、次のように結論づけたのである。

自由企業の下にある世界は、経済騎士道が発展するまでは、完全な理想から程遠いだろう。しかし、それが発展するまでは、集産主義の方向へのどんな大きなステップも、現代の程よい進歩率の維持にとってさえ由々しい脅威である。<sup>16)</sup>

として、「経済騎士道」がマーシャルのこの“Cool heads but warm hearts.”の表れであるかのように受け取れる<sup>17)</sup>。

16) 根井 [2006] pp. 46~48。根井 [1992] pp. 12~14、日本経済新聞社編 [2001.7] pp. 78~79 にも「経済騎士道」の記載がある。

17) マーシャルは、1907年に「経済騎士道の社会的可能性 (Social Possibilities of Economic Chivalry)」(Marshall [1907]) という講演を行ない（その後論文として *Economic Journal* に掲載された）、経済騎士道という概念を、中世に騎士道がもった高尚な公共精神を、ビジネスの世界でも実現することを期待して提唱した。実業家が己の利益だけでなく、労働者の福祉も考慮した上で、事業において成功を収めることに誇りを見出すこと、すなわちノブレスオブリージュの体現を意味するものとしている。

この論文の中の「戦争の騎士道とビジネスの騎士道」の中で、「我々の時代は、ときにいわれる程に浪費的でもないし、粗野でもない。国の所得の多くが、活向上に向けた用途にあてられている。しかしながら、改善の余地は大であるとともに、一点において我々は間違った方向に進みつつあるように見える。というのは、自分は富を見下していると心の中でさえ信じることは、富を誇りうるものたらしめるよう努める、ことよりも容易である。しかるに、実際には物質的資源は必然的に殆んどすべてのひとびとの思考と関心の対象となっているので、もしひとびとがその富を誇りえないなら、それは自身を尊敬しえないことになる。世界の真の栄光に奉仕するものとして富を扱うことは、大いに努力に値するのである。」(Marshall

根井は、近著の初学者向けの書物『経済学はこう考える』では、「第1章 冷静な頭脳と温かい心」としてマーシャルを取り上げ、  
「マーシャルがみずからの若き日を回想した文章を読むと、彼はいくつかの都市の最も貧しい地区を訪れて、ヴィクトリア朝の繁栄の影の部分を目の当たりにしたのですが、このような現状をどうにか改善できないのかという目的をもって経済学を研究する志を固めたと言っています。繁栄の影に隠れた貧富の格差 - マーシャルは、このような現状に憤りを感じる「温かい心」をもっていました。しかし、同時に、論理を重んじる数学者でもあった彼は、そのような貧富の格差を過激な社会運動によっていっぺんに改革しようとする人たちには同調できませんでした。その前に、その問題をあらゆる角度から分析してみる

---

[1907] p. 13), そこで、「自分はビジネスにも多くの隠れた騎士道が存在することを示唆したい。もし我々がビジネスの騎士道の探索と賞讃を一ないし二世に亘り続けるなら、彼の世で現代のひとびとは富の騎士道について大胆に語るようになるであろう。かれらは、富の生産とその使用において人間性の繊細な要素を最大に訓練することで達成されてきたところの生活向上を誇りとするであろう。ビジネスの騎士道は、公共的精神を含む。戦争の騎士道が君主、国家、もしくは十字軍といったものの大義に対する非利己的な忠誠を含むように。それはまた、騎士道におけると同様に、そのことが高貴であり困難であるが故に、高貴で困難なことを行なうという喜びを含む。それは、安易な勝利に対する軽蔑と助けを必要とするひとびとを助けることへの喜びを含む。それは、獲得された利得を軽蔑しないのであって、その業績の証明として戦利品を評価する戦士の喜びをもつのである。」(p. 14。下線部：筆者)と述べている。結論として、「世の中には多くの経済騎士道が存在するのであって、最も重要にして進歩的であるビジネス活動に騎士道が伴っていないことは滅多にない。無論、騎士道的でない富の獲得活動も多く存在するし、高貴さの見られない支出も多々存在しているのであって、騎士道が普遍的となるための努力が社会に求められる。そしてここから、世論が非公式的な名誉法廷 (Court of Honour) となるように世論を導く努力がなされるべきである。」(pp. 25~26。下線部：筆者。永澤訳 [1991] pp. 137~139, 155~160)と述べ、さらに「ビジネスにおける騎士道は、富の使用における騎士道へと到達する。人目を引くだけの支出は、下品であるとされよう。まだ有名でない芸術家の良い作品の購入や社会へのその寄付は良い評判を得るであろう。……個人の側の経済的騎士道はコミュニティ全体のそれを鼓舞するとともに、コミュニティの側のそれによって鼓舞されるであろう。……両者は相俟って、例えば市民にとって快適な自然環境を整えるための基金や弱者救済のためのそれを生むことになろう。」(p. 27)と述べている。また、『経済学原理』(第9版)の第6編第13章には「経済騎士道という社会的可能性が広く理解されるようになれば、いろいろな点で害悪の発生を抑えることができるように思う。社会的な知識の普及につれて、富有な人々が公共の福祉に強い関心を示すことになれば、かれらの資力を財政をとおしてまずしい人々のために有効に活用することができ、貧困という最大の害悪を地上から取り除くに貢献させることもできよう。」(p. 719。馬場訳第4巻 [1967] p. 289)と書いている(第13章は、大幅改定の第5版で旧第12章から分離され、新たに起こされた章で「生活基準」が取り上げられ、その中で経済騎士道も追加された)。

「冷静な頭脳」が必要だと考えたからにほかなりません。」<sup>18)</sup>

と書いて、「経済騎士道の精神」の記述に繋げている。「冷静な頭脳と温かい心」の実現したものが「経済騎士道」という理解なのであろう<sup>19)</sup>。

### [32] 「経済騎士道」と協同・協同組合

#### (1) マーシャルと協同・協同組合

マーシャルが、協同 (cooperation)・協同組合を評価したことは広く知られている。協同組合会議の会長を務めていたこともあり、そのいくつかの著書・論文でも協同・協同組合に度々言及している。とくに、協同組合会議 (Cooperative Congress) の 1889 年 Ipswich における第 21 回年次大会での会長講演 (Presidential Address) を、「Co-operation」と題して行なったように、協同・協同組合に相当シンパシーを持っていたようである<sup>20)</sup>。その主著『経済学原理』にも協同・協同組合に言及が多く、たとえば第 4 編第 7 章「富の発達」の中でも、一国の貯蓄の増大・資本形成に寄与する点について、「いろいろな形態の協同組合、住宅建設組合・互助組合・労働組合・労働者貯蓄銀行などの協同組合運動の発達は、物的富の直接の蓄積にかぎってみても、一国の資源は賃金支払いに充当しても、旧派の経済学者たちが説くように、資源の空費となるとはいえないことを実証している。」<sup>21)</sup>と書いているように、協同組合に肯定的である。良く知られているのは、マーシャルの初期の著作で、メアリー夫人との共著である『産業経済学』(*The Economics of Industry*, 1879) の第 3 編第 9 章が「協同組合 (Co-operation)」と題された章であり、そこでは「協同組合の目標と初期キリスト協会の「財の共有」との類似性やオーエンとマルクスにふれつつ、協

18) 根井 [2009] pp. 12~13。

19) マーシャルの経済騎士道については、多くの研究があり、日本でも馬場 [1961]、斧田 [1971]、西岡 [1997] や最近のものでも櫻井 [2004]、田中 [2009]、大山 [2010]、山本 [2011] などでも論じられている。

20) Pigou [1956] pp. 227~255。マーシャルの協同組合に関する研究には、Dévadhar [1971]、Elliot [1990] や藤田 [1991]、橋本 [1998] などがある。協同については、多くの経済学者も支持している (J. S. Mill, Walras, Jevons, Pigou, Robertson など)。橋本 [1998] によれば、「マーシャルの協同組合に関する発言を年代順にみてゆくと、最初の期待は少しずつ修正されていくのが分かる。」(p. 48) として、その主張が「当初においては……協同組合の経営者が、マーシャルの言う「経済的騎士道」を地でいくような存在であったものから、」(p. 48)、「協同組合のもっていた道徳的感化に関する影響力の衰退を、やや冷やかに観察している。」(p. 63) と変化したことが示されている。

21) Marshall [1961] p. 230, 馬場訳第 2 分冊 p. 202。

同組合主義者の社会主義者との共感が語られている」<sup>22)</sup>ということである<sup>23)</sup>。

マーシャルは主著『経済学原理』の中でも、第4編第12章「産業上の組織論 企業経営」では、規模の経済に関して各種の企業形態（株式会社・合名会社・公営企業など）について触れた後で、株式会社・公営企業の弊害を乗り越えるものとして、「協同組合は以上にみた2つの経営管理の方法のもつ弊害をさげようとするものである。」<sup>24)</sup>と位置付けている。しかし、協同組合にもその管理者に人材が得られにくいことなどから、「協同組合制度が十分に活用されたことはまれ」であることを指摘しつつも、収益配分制や部分的協同経営などによって、「協同組合運動という高次の仕事を受け入れる基盤がようやくできあがり始めた」<sup>25)</sup>と論じている。

マーシャルが経済学研究に取り組む契機、その基本的スタンスは、[2.1]で指摘したように、貧困の原因の究明と貧困の解決にあった。1889年の Ipswich 講演 “Co-operation” においても、この貧困問題の存在を指摘しており、貧困問題が格差にある点を強調して、「すべての人が生まれた場所につねに留まるような、きびしい階級制度が、あわれな制度であることは事実であります。希望と、功名心と、自由競争の作用する余地があるということは、人間の進歩にとって、私たちの考えるかぎり、必要な条件であります。しかし、私たちの現在の体制の持つ大きな邪悪は、そしてそれを破棄することが、私が考えます協同組合の主要な目的でありますが、人々の努力が刺激される希望と功名心が、そのなかにもあまりにも多くの利己的な要素を持ち、利己的ではない要素をあまりにもわずかししか持っていないという事実であります。」（下線部：筆者）<sup>26)</sup>と述べているように、貧困問題・それを生む格差問題、当時のイギリスの体制を打破する上で、協同組合の役割が大きいことを強調したのである。協同組合について「時代の典型的な、もっとも代表的な産物」で、「協同組合は、高い志望と、平静で、精力的な行動を結合するもの」<sup>27)</sup>とその講演の冒頭で指摘して、

22) 藤田 [1991] p. 174 (776)。

23) cooperation は邦訳が「協同組合」であり、多くの論者もそのように扱っているが、「協同」とする方が良いのではなかろうか。協同組合はむしろ cooperatives であり、マーシャルが組織としての協同組合を意味したのか、協同という理念を論じたものかを、区別する必要があるのではないか。

24) Marshall [1961] p. 305, 馬場訳第2分冊 p. 298。

25) Ibid., pp. 306~307, 前掲書 pp. 300~302。

26) Pigou [1925] pp. 237~238, 永澤訳 [1991] pp. 232~233。

27) Ibid., p. 227, 前掲書 pp. 219~p. 220。

その上で経済騎士道との関連を「ロマンチックな騎士道の時代は過ぎ去りました。遍歴騎士が、危機にさらされた少女を、おそろしい巨人の城から救い出し、あるいは火焰を吐き出す竜を退治するという時代では、もはやありません。しかし、偉大で、価値ある目的のための勇気と、騎士道的な自己犠牲に対しては、いつの時代にも変わらない高い呼び声が存在します。協同組合の信仰に満たされた人々が、配当以外には協同組合的なものにはほとんど関心を持たない人々によって、選挙において敗北するのを見出す失望を耐えなければなりません。そして、依然として彼らの勇気を持ちつづけ、かれらの気質を持ちつづけ、勝利を手にするまで、繰り返してすぐれた戦いをたたかわなければなりません。……協同組合という現代の騎士階級のもっとも忠実で、勇敢な騎士の多くの方が出席されると、……彼らに対しては、私は、イギリスの卸売協同組合の高貴なモットーである「働きそして待つ」(“Labour and Wait.” 筆者記)ことを繰り返したいと思います。」(下線部：筆者)<sup>28)</sup>と述べて、経済騎士道が協同・協同組合によって担われることを指摘しているのである。

## (2) 「経済騎士道の社会的可能性」(1907)

さらに、マーシャル自身が「経済騎士道の社会的可能性」の中の「8」において、「国民の社会的な改善を促進するために真剣に努力する人々は、時に社会主義者と呼ばれます。そのような仕事の多くが、個人の努力によるよりも、国家によってよりなされることを信じているかぎり、そのように呼ばれます。この意味では現代のすべての経済学者はすべて社会主義者であります。私自身も、経済学について何も知らない以前から社会主義者でありました。私が A. スミスと J. S. ミル、そしてマルクスとラッサールを読んだのは、社会改革において、国家その他の機関によってできるものは何か、を知りたいと思う願望からでありました。それ以来私は、そのような意味では、いよいよ確信に満ちた社会主義者として成長し続けました。」<sup>29)</sup>と述べているように、前述の根井

28) *Idid.*, pp. 251~252, 前掲書 pp. 250~251。

29) Marshall [1907] p. 17. Pigou [1925] p. 334, 永澤訳 [1991] p. 143。ケインズは『人物評伝』において「わりと若い頃、とりわけ 1885 年から 1900 年にかけて、彼は労働運動の指導者を招待して、いっしょに週末を過ごすのが好きであった。たとえば、トーマス・パート、ベン・ティレット、トム・マン、その他大勢のものがそれである。時によるとこうした訪問が、訪問者たちがよく演説をしていた社会問題討論会の会合に早変わりすることもあった。こういうふうにして、彼は前代の指導者的協同組合主義者や労働組合主義者の大部分と知り合うよ



[2006] の引用にあるように社会主義にすら共感を持っていたのである。この点に関する多くの先行研究も、マーシャルが協同に関して一定の理解を示しており、単なる自由主義・市場一辺倒の思想ではないことを論じている。

この点について、Dévadhar [1971] は、「マーシャルは偉大な新古典派経済学者であるが、その言葉の厳密な意味での協同組合論者ではない。しかし、彼の協同組合に対する理解は思想的にも、彼の理論全体としても重要で専門的経済学者・協同組合論者にとって無視できるものではない。」と指摘している<sup>30)</sup>。また、美濃口 [1992] は以下のように指摘して、マーシャルの協同に対する共感にも一定の留保が必要なことを論じた。すなわち、「マーシャルは、資本主義経済のもたらす弊害として、商品売買にともなう不正、労働の売買にともなう分配の不平等を認識し、そうした弊害を取り除こうとする協同組合運動に積極的に認めていたことがわかる。しかし、他方で、こうした運動が私有財産の根本原則や個人の自由の尊重に抵触しないかぎりという限定をつけていることに注意する必要がある。」<sup>31)</sup>としている。

マーシャルは基本的には私有財産制度に基づく資本主義を前提に議論しているのだが、この点について、美濃口 [1992] は、「マーシャルは基本的には、私有財産制度の上に成り立つ資本主義経済の方が、私的企業心を発揮させ、個人の創意・工夫を最大限に生かせるという意味において、経済体制としては秀れていると考えていたことがわかる。しかしそれにもかかわらず、社会主義に同情を示し、労働組合運動や協同組合運動のような社会主義的活動に積極的な意義を認めたのは、資本主義経済における過酷な競争が、ややもすると取引上の不正や、所得分配の不平等という弊害をもたらしかねないからであった。したがって、そうした弊害を除去するために、ある程度国家が経済に介入したり、労働者が団結することを認めたわけである。また生産手段の公有や公企業についても、すべて反対したわけではなく、私的企業にゆだねていたのでは整備されない社会資本、たとえば水道、電力、運輸については公企業の存在を認めてい

---

うになった。またく、彼は知的見地をべつにすれば、あらゆる面で (J・S・ミルと同様に) 労働運動や社会主義に同情をもっていたのである。」(熊谷・大野訳 [1959] p. 177, *Collected Writings* Vol. X, p. 214, 『全集第 10 巻』大野訳 [1980] p. 284) と書いている。

30) Dévadhar [1971] p. 285. Dévadhar は、Ipswich address と『経済学原理』を中心に、マーシャルの経済学のスタンス、協同の哲学・協同組合の制度について整理し、内容的には本稿と同様な指摘をしている。

31) 美濃口 [1992] p. 13。

る。以上のようにマーシャルは近代経済学の始祖でありながら、かなりふところの深い近代経済学者であり、単純な自由主義者ではなかったといえよう。<sup>32)</sup>と論じて、単なる自由主義・市場重視主義論者でもなく、単なる協同組合主義者でもないことを示したのである。つまり、マーシャルは資本主義経済の暴走・弊害・失敗には慎重な対応を求めたものと理解できる。

このようにマーシャルが協同・協同組合にシンパシーを持っていたとしても、単に協同組合論者と評価するのは短絡的であるし、マイオピックである。とはいえ、マーシャル自身が先の Ipswich での会長講演 “Co-operation” で、協同組合のメンバーが騎士道の有力な担い手であり、騎士道の自己犠牲と勇気と自制心をもって行なわれる行動がある、と指摘して、協同組合が経済騎士道を体現するものとしているのである。協同こそ経済騎士道そのものであると理解されよう。

前述のように、マーシャルの経済騎士道の論文である Marshall [1907] でも、協同の機能に期待している点が明確にされており<sup>33)</sup>、マーシャルの協同組合に関する研究である Elliott [1990] も同様なことを記している<sup>34)</sup>。このようにマーシャルが協同に経済騎士道を期待していたことが明らかである。

### [3.3] “Captains of industry” - 「経済騎士道」のコンテキストで -

“Captains of industry” は、辞書的には産業界のリーダー（産業界の大立者、会頭）を意味する言葉であるが、単にリーダーを目指すだけでなく、それを通じて社会に貢献し、他者への思いやりを重視するという「経済騎士道」を体現する言葉として知られる。まさにノブレスオブリージュ (noblesse oblige) の実現である。この “Captains of industry” は、国際的に通用する産業界のリーダーたり得る人材の育成という理念を表す語として、一橋大学が、その創設以来、事実上、校是として掲げてきた経緯があり、そこに学んだ者は等しく思い

32) 前掲論文 p. 15. Marshall [1907] は経済システムとしての社会主義に問題があることについて、「集産主義の統制が自由企業に残された領域を制限するならば、官僚主義の圧力が、物的な富の源泉のみならず、人間性的高级で、その強化こそが、社会的努力の主要な目標であるべきものを損うことを確信します。」( pp. 17~18, Pigou [1925] p. 334, 永澤訳 [1991] pp. 143~144 ) としている。

33) Marshall [1907] pp. 17~20.

34) Elliot は、“Cooperation is the great order of modern chivalry” であること、cooperative enterprises が公企業と民間企業のもつ弊害を回避し、協同が資本主義の持つ広大かつ強力な営利的基盤と社会主義の崇高な社会目的を巧みに調和させるものと指摘している。

を馳せる言葉で、折に触れ語られてきた。

この言葉の由来は、イギリスの思想家で歴史家のカーライル (Thomas Carlyle [1795~1881]) が、1843 年に著した *Past and Present* で使用したとされる。その書物の Book 4 “Horoscope” の第 4 章が “Captains of industry” という標題で、この中でカーライルは、“Captains of the world” としての “Leader of industry” を論じている。カーライルのこの書物は 1843 年の刊行であるが、マーシャルの “Cool heads but warm hearts.” が 1885 年であるから、半世紀先立つもので、「経済騎士道」はイギリスの伝統的な思想であるのであろう<sup>35)</sup>。

一橋大学学園史刊行委員会編『一橋大学 120 年史：captain of industry をこえて』（一橋大学、1995 年 9 月）では、“Captain of industry” が一橋大学の校是になる経緯について、「1900（明治 33）年の佐野善作の帰国につづいて、翌 1901 年には、福田徳三、関一、志田鉦太郎、石川巖、神田乃武ら少壮教授が次々と帰国した。彼らは講壇の上からヨーロッパ諸国の商業教育理念を学生たちに熱っぽく語りかけた。“Captain of Industry” のスローガンが叫ばれ、産業の指導者・経済騎士道の追求は、こうして高商生すべての目標となったのである。」（p. 53）と記している。

“Captain of Industry” は、このように一橋大学では校是とされてきたものの、その語源・典拠は必ずしも明確ではなかったが、これについて、小泉明元学長がカーライルによることを指摘されたことを『一橋大学 120 年史』は次のように明らかにしている<sup>36)</sup>。

#### すなわち

「従来、この “Captain of Industry” という言葉の出所は何であるか、必ずしも自明ではなかった。小泉明元学長は、1975（昭和 50）年度の卒業式および一橋大学創立百年記念式典の挨拶で初めてこの問題にふれ、この言葉はトマス・カーライルの “Past and Present”，『過去と現世』（1843 年）を典拠としていたことを明らかにしている。「キャプテン・オブ・インダストリーというのは単に産業界の覇権を握れという意味ではありません。この言葉を作ったのは、トマス・カーライルですが、彼は十九世紀前半のイギリスの産業界をみて営利

35) captain はリーダーという意味のほかに多岐に亘る意味を持つが、船長・艦長を指す言葉であり、船長は船が沈みそうなときに最後まで守り、脱出する際には最後に船を離れるという騎士道精神を体現することがその心得とされる仕事である。

36) 故小泉明学長は、1975 年 8 月に就任され、在職中の 1977 年 2 月に逝去された。筆者の恩師である。

至上原則の弊害を指摘し、人間愛にめざめた新しい型の経営者像を待望してこの言葉をつくったのです。」(pp. 53~54)と記載している<sup>37)</sup>。

カーライルの *Past and Present* の Book 4 “Horoscope” の第4章 “CAPTAINS OF INDUSTRY” には<sup>38)</sup>、

“The Leaders of Industry, if Industry is ever to be led, are virtually the Captains of the World; if there be no nobleness in them, there will never be an Aristocracy more. But let the Captains of Industry consider: once again, are they born of other clay than the old Captains of Slaughter; doomed forever to be no Chivalry, but a mere gold-plated *Doggery*, –what the French well name *Canaille*, ‘Doggery’ with more or less gold carrion at its disposal? Captains of Industry are the true Fighters, henceforth recognisable as the only true ones: Fighters against Chaos, Necessity and the Devils and Jötuns; and lead on Mankind in that great, and alone true, and universal warfare; the stars in their courses fighting for them, and all Heaven and all Earth saying audibly, Well done! Let the Captains of Industry retire into their own hearts, and ask solemnly, If there is nothing but vulturous hunger, for fine wines, valet reputation and gilt carriages, discoverable there? Of hearts made by the Almighty God I will not believe such a thing. Deep-hidden under wretchedest god-forgetting Cants, Epicurisms, Dead-Sea Apisms; forgotten as under foulest fat Lethe mud and weeds, there is yet, in all hearts born into this God’s-World, a spark of the Godlike slumbering. Awake, O nightmare sleepers; awake, arise, or be forever fallen! This is not playhouse poetry; it is sober fact. Our England, our world cannot live as it is. It will connect itself with a God again, or go down with nameless throes

---

37) 『創立百年記念式典誌』一橋大学、1976年 pp. 1~3。但し、上田貞次郎『英国産業革命史論』(同文館、1923年1月)には、「キャプテン・オブ・インダストリー」や「カーライル」についての言及がある。「一橋大学附属図書館常設展示より：Captains of Industryの由来」に詳細な紹介がある。[http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/j/captains\\_of\\_industry.html](http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/j/captains_of_industry.html) (2013年4月1日アクセス)

38) <http://www.gutenberg.org/cache/epub/13534/pg13534.html> (初版と思われる。2013年4月1日アクセス)  
[http://books.google.co.jp/books?id=CIE9AAAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](http://books.google.co.jp/books?id=CIE9AAAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false) (Collected Works Ver. 1870. 2013年4月1日アクセス)

and fire-consummation to the Devils. Thou who feelest aught of such a Godlike stirring in thee, any faintest intimation of it as through heavy-laden dreams, follow *it*, I conjure thee. Arise, save thyself, be one of those that save thy country.”（初版 p. 261, 図<sup>39)</sup>）

とある。邦訳は、

「産業が指導できるものならば、産業の指導者は実質的に世界の指揮者である。かれらに気高さがなければ、もはや貴族というべきではない。しかし、産業の隊長たちはよく考えてみるべきである。言葉をくり返すが、かれらはもともとむかしの「殺戮の指揮者」と別なものに生まれついて、永久に騎士にはなれず、ただ金でメッキした「犬」――黄金の腐肉を多少は自由にできる犬ども、つまりフランス人がうまく「<sup>カナイユ</sup>下賤者」とよんだものにしかねないのであるか？産業の隊長は、真の戦士である、これからは唯一の真の戦士と認められるであろう。混沌、必然、悪魔や巨人などに立ち向かう戦士であり、あの偉大な、これのみが真実である、世界的な戦争において人類を導く。「もろもろの星は天より戦い」、そして天も地もいっせいに声高らかに「でかした！」とさけぶ。産業の隊長は、われとわが心のうちに退いて、まじめにたずねてみるがよい、かれらの心の中には、美酒と、さもしい名声と、金ピカの馬車を求める、貪欲な欲望しかないのか、と。全能の神によって造られた人間の心について、わたしはそういうものを信じたくない。もっとも忌まわしい、神を忘れた偽善、道楽、死海のほとりの猿の仮面の下に深くかくれ、もっともきたない、あぶらぎった忘却の<sup>レ</sup>川<sup>ー</sup>の泥や水草の下にあるかのように忘れられながら、この神の世界に生をうけたすべての人びとの心のなかに、依然として神性のきらめきが、ねむっているのである。目ざめよ、夢魔にうなされて眠る人びとよ、目ざめて、起きよ、さもなければ永久に堕ちてしまうであろう！これは芝居のセリフではない、厳粛な事実である。わがイギリス、わが世界は、このままでは生きつづけることはできない。それはふたたび神と結びつくか、さもなければ言語に絶した苦しみをなめ、劫火に焼きつくされて、悪魔のもとへ堕ちて行くのである。こうした神性がみずからのうちに動くのを感じ、うなされた夢のなかでそ

---

39) [http://books.google.co.jp/books?id=CIE9AAAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](http://books.google.co.jp/books?id=CIE9AAAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false) (Collected Works Ver. 1870. 2013年4月1日アクセス) による。

れのかすかな暗示をいくらかでも感じる者よ、それにしがえ、とわたしは願う。起て、みずからを救い、なんじの国を救う者の一人となるべきである。」<sup>40)</sup>である。

一橋大学のホームページには、「明治8(1875)年に森有礼が私設した商法講習所の時代から本学は、単に西洋式の「商法」-「商い方」を身に付け、即戦力になる人材を供給することだけではなく、“キャプテンズ・オブ・インダストリー”にふさわしい実業人の育成を目標としてきました。産業界における高貴な騎士道精神を前提とした“キャプテンズ・オブ・インダストリー”は、一橋大学の理念として、今に至るまで語り続けられてきました。」と記載されている<sup>41)</sup>。さらに、2008年一橋大学はこの言葉を踏まえて、“Captains of Industry ~ 知と業(わざ)のフロンティア ~”をキャッチフレーズとして選定し、各種活動に使用している<sup>42)</sup>。

カーライルが *Past and present* を著した時期は、ヨーロッパで協同の思想が開花した時期に符合する。R. オーエンが共同体思想を目指した時期であり、ロッチデール公正先駆者組合が設立されたのが1844年、イカリアというユートピア実現を目指したカペーの『イカリア旅行記』は1840年に初版が出版され、「万人はひとりのために」を掲げたデュマの『三銃士』は1844年の出版で、「ひとりは万人のために」を記したその『スイス紀行記』は1833年に出ている<sup>43)</sup>。マーシャルは、前に整理したように、協同組合の有効性をその初期の著

40) 上田和夫訳『過去と現在』(カーライル選集 3), 日本教文社, 1962年11月 pp. 385~386。  
久我太郎は“Tempus fugit”(『鐘：一橋大学附属図書館報』No. 32, 1997年3月)で、「ヨーロッパ留学中の1901(明治34)年2月に「商科大学設立ノ必要」と題するいわゆる「ベルリン宣言」を起草して高等商業学校から大学への昇格運動を展開した本学の若手教員8名は、このスローガンにいたく感激、帰国後「産業の指導者としての経済騎士道の追求」を高商生の目標としたものの如く、それをうけた学生の檄文のスローガンとして度々見られ、爾来母校に事あるごとに高唱され周知され今日に至った。『過去と現在』には多くの版があり、Penguin版1冊もの『カーライル選集』(1967)にも『過去と現在』は入っているが第4巻4章は省略されている。原著刊行から時移り編者の興味がキャプテンズにはなくなったと見える。原文として本学附属図書館蔵マクミラン版(1927)を参照すると *Captains of Industry* であるが、その後人口に膾炙するにつれキャプテン(単数)になっていったらしい。」(p. 6)と書いている。

41) [http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/j/captains\\_of\\_industry.html](http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/j/captains_of_industry.html) (2013年4月1日アクセス)

42) [http://www.hit-u.ac.jp/guide/outline/captains\\_of\\_industry.html](http://www.hit-u.ac.jp/guide/outline/captains_of_industry.html) (2013年4月1日アクセス)

43) この点については、村本[2014]参照。

( 図 ) Carlyle, T., *Past and Present* (1843) [ Collected works Version, 1870 ] の当該箇所  
( [http://books.google.co.jp/books?id=CIE9AAAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](http://books.google.co.jp/books?id=CIE9AAAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false). 2013 年 4 月 1 日アクセス )

Chap. IV.

CAPTAINS OF INDUSTRY.

335

as yet in too many senses a Virtuality rather than an Actuality.

The Leaders of Industry, if Industry is ever to be led, are virtually the Captains of the World; if there be no nobleness in them, there will never be an Aristocracy more. But let the Captains of Industry consider: once again, are they born of other clay than the old Captains of Slaughter; doomed forever to be no Chivalry, but a mere gold-plated *Doggery*,—what the French well name *Canaille*, ‘Doggery’ with more or less gold carrion at its disposal? Captains of Industry are the true Fighters, henceforth recognisable as the only true ones: Fighters against Chaos, Necessity and the Devils and Jötuns; and lead on Mankind in that great, and alone true, and universal warfare; the stars in their courses fighting for them, and all Heaven and all Earth saying audibly, Well done! Let the Captains of Industry retire into their own hearts, and ask solemnly, If there is nothing but vulturous hunger, for fine wines, valet reputation and gilt carriages, discoverable there? Of hearts made by the Almighty God I will not believe such a thing. Deep-hidden under wretchedest god-forgetting Cants, Epicurisms, Dead-Sea Apisms; forgotten as under foulest fat Lethe mud and weeds, there is yet, in all hearts born into this God’s-World, a spark of the Godlike slumbering. Awake, O nightmare sleepers; awake, arise, or be forever fallen! This is not playhouse poetry; it is sober fact. Our England, our world cannot live as it is. ~~It will connect itself with a God again, or go down with nameless throes and fire-consummation to the Devils.~~ Thou who feelest aught of such a Godlike stirring in thee, any faintest intimation of it as through heavy-laden dreams, follow it, I conjure thee. Arise, save thyself, be one of those that save thy country.

書『産業の経済学』[1879]で論じているほか、Ipswich 講演(1889年)、主著『経済学原理』(1890年)でも記しており、さらに“The Social Possibilities of Economic Chivalry”(1907年)においては、政府の福祉の促進に対する役割の増大

の重要性を論じた部分で、議会改革、教育の普及などと並んで、政府の役割の改革が協同の出現により進展し、またその改革を目指した何人かの思想家の中にカーライルを挙げている<sup>44)</sup>。

#### 4. ケインズのマーシャル批判

##### [4.1] ケインズ『一般理論』のドイツ語・日本語版序文

根井が指摘するように、「マーシャルは、一流の経済学者であったばかりでなく、教育者としても優れていた。ケンブリッジ大学在職中に育て上げた研究者のなかには、ピグー (A. C. Pigou)、ケインズ (J. M. Keynes)、ロバートソン (D. H. Robertson) などのように、経済学の歴史に大きな足跡を残した人物が含まれている」のである。ケインズはマーシャルの忠実な後継者として、「マーシャルが創設した学派は、その所属した大学に因んで、「ケンブリッジ学派」と呼ばれるようになったが、これは、1930年代の「ケインズ革命」に至るまで、イギリスにおける正統派経済学の地位を保持した極めて強力な学派であった。」<sup>45)</sup>と根井が言うようにケンブリッジ学派に属していた。

しかし、この引用にあるように、ケインズ革命、すなわち、ケインズは、『雇用・利子および貨幣の一般理論』(*The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936)においてマーシャル理論を否定したといえる。ケインズは、この書物のドイツ語版の序文(1936年9月7日付け)と日本語版の序文(1936年12月4日付け)で下記のように書いている。

「現代のすべてのイギリス経済学者は、アルフレッド・マーシャルの『経済学原理』によってはぐくまれてきたが、そのマーシャルは自分の思想がリカードウの思想と連続していることを強調するのにとくに苦心を払っていた。彼の仕事は大部分、限界原理と代替の法則をリカードウの伝統に接続させることであった。そして彼は、一定の産出量の生産および分配に関する彼の理論とは異なった、全体としての産出量および消費に関する彼の理論をけっして別個に展開することがなかった。彼自身がそのような理論の必要を感じていたかどうかは、私は知らない。しかし、彼の直接の後継者や追隨者たちはたしかにそのような

44) Marshall [1907] p. 19. Pigou [1925] p. 335, 永澤訳 [1991] p. 145. ほかに, Scott, Dickens, Wordsworth, Tennyson, Ruskin, Newman, Maurice そして Owen を挙げている。

45) 根井 [2005] p. 257.



理論をもたず、しかもそれをもたないことに気づいていなかったように見える。私はこのような雰囲気の中で成長し、私自身このような学説を教えてきた。私がその不完全さを意識するようになったのは、ようやく過去 10 年以内のことである。したがって、この書物は私自身の思想とその発展の上での反動であり、イギリスの古典派的（あるいは正統的）伝統からの離脱を示すものである。私が以下においてこのことを強調し、私が通説と意見を異にする点を力説したことは、イギリスにおける一部の人々から不当に論争的であると見られている。しかし、イギリス経済学の正統派の中で育てられ、一時はその信仰の伝道師でさえあったものが、ひとたび新教徒となった場合、ある程度の論争的強調をどうして避けることができるだろうか。」<sup>46)</sup>

このように、ケインズはマーシャルの経済理論が配分・分配に終始し、リカードの経済思想を継承していること、他方所得決定理論ないしマクロ的分析の無いことを指摘して<sup>47)</sup>、貯蓄投資による所得決定理論すなわち有効需要の原理

---

46) Keynes, J. M., *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936. 塩野谷九十九訳 [1941] p. 5. *Collected Writings* Vol. VII, 1973, p. xxv & p. xxix, 『全集第 7 巻』塩野谷祐一訳 [1983] p. xix & p. xxiii. この部分の山形訳は次の通りである「アルフレッド・マーシャル『経済学原理』は現代のイギリス経済学者がみんな勉強に使った本ですが、そのマーシャルは自分とリカードとの思想的連続性を強調しようとして、ずいぶん苦労していたものです。その作業はもっぱら、限界原理と代替原理をリカードの伝統に接ぎ木しようというものでした。そして、ある決まった産出の生産と分配はきちんと考えたのですが、社会全体の産出や消費に関する理論は独立に検討しませんでした。マーシャル自身がそうした理論の必要性を感じていたか、私にはわかりません。でもその弟子や後継者たちは、まちがいなくそんな理論なしですませてきたし、どうやらそれが必要だとも思っていない。私はこういう雰囲気の中で育ってきました。自分でもそうした協議を教えたり、それが不十分だと意識するようになったのも、過去 10 年ほどのことでしかありません。だから私自身の試行と発展の中では、この本は反動の結果で、イギリス古典派（あるいは正統派）の伝統から離れるための変転を示すものです。以下のページではこの点と、そして教えを受けた教義からの逸脱点が強調されていますが、それはイギリスの一部では、無用にケンカ腰だと言われています。でもイギリスの経済学正統教義で育った人物、いやそれどころか、一時はその信仰の司祭だった人物としては、プロテスタントに初めてなろうとする時に多少のケンカ腰の強調は避けられますまい。」(山形 [2012] pp. 40~41, pp. 510~511)

47) マーシャルのマクロ経済理論について、伊藤 [2006] は「第 1 章科学者と説教者 - A. マーシャル」の中で、「マーシャルが学説史上に名を残したのは主にミクロ経済学の業績によるが、後のケンブリッジ学派の発展という観点から重要なのは、むしろマクロ経済学への貢献の方である。ケンブリッジ学派のその後のマクロ経済学上の興隆に寄与した理論家は、必ずマーシャルからの強い影響を認め、その示唆を導きの糸としたことを告白している。しかし、マーシャルのマクロ経済学上の業績については、貨幣数量説の変種としての現金残高数量説程度のことしか知られていないのが実情である。マーシャルのマクロ経済学が忘れ去られて

・乗数理論の骨格とするケインズ革命を提起したのである。この文章に続いて、先の注3に示したように、  
「私はリカードではなくてマルサスの系統に属するこの書物が、少なくとも一部の人々からは共感をもって受け入れられるのではないかと考えている」と書いて、イギリスの正統派経済学がリカードからマーシャルに至る伝統に対して、ケインズ革命がマルサスからケインズへという潮流にあることを示したのである。

#### [42] ハロッド (Harrod, R.) の指摘

ケインズの高弟であるハロッドは、ケインズがマーシャル経済学に否定的であったことについて、いくつかの文献で指摘している。まず、オックスフォード大学のチチェリ講義の講義録である『社会科学とは何か』(*Sociology, Morals and Mystery*, 1971)の中で、マーシャルの『経済学原理』に触れて、「私の若い頃は、アルレッド・マーシャルが、非常に大きく浮び上がっていました。彼が経済学の一般原理を完成してしまっただけで、後に続く人間には仕事が残っていない、あるとすれば、一般原理を具体的ケースに適用する努力をし、経済の個別的部分の記述的研究を行うことだけだ、と考えられていました。ケンブリッジの経済学者たちは、敢えて根本原理に触れるという時は、「何も彼もマーシャルにある」と言うような調子でした。確かに、非常に多くの場合、その通りでした。けれども、「何も彼も」は、必ずしも大したことではないのです。私は覚えています、1920年代のケンブリッジで、私がケインズと話していた時、マーシャルの『経済学原理』の話になったことがあります。ケインズは申しました。「君は気がつかないのかい、あれはカラッポの本だよ。」<sup>48)</sup>と書き、ケインズのマーシャルへの厳しい見方を示している。

さらに、ハロッドはその著『ケインズ伝』(1951)の中で、マーシャルとケインズとの関係を時系列的に、書簡を交えて以下のように記述している。最初に、マーシャルが自らの学生であるケインズのことを高く評価していることを、ケインズの父親の日記とマーシャルから父親への書簡を示して、

しまったのは、著作の形で体系化する時間をもたなかったこと、口承でしか伝わらなかったことなどが原因として考えられる。」(pp. 30~31)と指摘して、必ずしもミクロ経済学一本槍ではなかったとしている。伊藤[2006]の序章のタイトルは「理論と現実の狭間で - cool heads but warm hearts」と記されている。

48) Harrod [1971]・清水幾太郎訳 [1975] pp. 127~128.

「秋学期に彼はケンブリッジに帰り、マーシャルの講義に出席した。「メイナードはマーシャルのために随分勉強している。マーシャルは、メイナードの解答のいくらかを見事であると評している。私は（Maynard の父：筆者記）マーシャルが彼に経済学のためにすべてを放棄するよう説得に努めているのではないかと知っている。」（ケインズ博士（Maynard の父 John Neville Keynes のこと：筆者記）の日記，1905 年 11 月 26 日）

《アルフレッド・マーシャルから J. N. ケインズ博士へ，1905 年 12 月 3 日》

ご子息はいま経済学のすぐれた研究ぶりを見せています。私（マーシャル：筆者記）は彼に、もし彼が専門的経済学者になる決心をしたら非常にうれしいと話したことがあります。しかしもちろん私は彼に強制してはいけないと思っています」<sup>49)</sup>

として紹介している。

これに対して、ケインズはマーシャルの愛顧に対して、友人への書簡で、  
「J. M. ケインズから G. L. ストレイチャーへ，1905 年 11 月 23 日」

マーシャルは僕に専門的経済学者になるよう絶えず勧めており、その美拳を促すために僕の論文にお世辞のいい批評を書いている。それにはなにかあると君は考えるか。僕はそうは思わない。もし僕が欲しさえすれば、僕はおそらくここで職を得ることができるだろう。しかしこの場所で僕がいつまでも暮らすことは、たしかに、死ぬようなものだと思っている。唯一の問題は、ロンドンにおける官庁が同じように死ぬようなものではないかということだ。<sup>50)</sup>  
と書いて、距離を置いていることを指摘している。

その上で、駄目を出すように、下記のケインズの友人に宛てた書簡を紹介している。

「J. M. ケインズから R. H. ダングラスへ，1906 年 9 月 13 日」

君がマーシャルにあったとは面白い。きわめて偉大な人物だ。しかし彼は個人的性格においてはむしろばかげた人物だと思う。夫人はなかなか魅力的じゃないか。

（この部分のハロッドの書いた注記：筆者記）

私はこの手紙を人間としてのマーシャルに関する彼の気持ちを示す唯一の証拠にしようとするのではない。幾度か個人的な会話において、私がマー

49) Harrod [1951]・塩野谷九十九訳『ケインズ伝（上巻）』[1967] pp. 125~126。

50) 前掲書，p.131。

シャルについて話すとき偉大な人物に当然払うべき尊敬の念を語調に現わすと、メイナードは私の誤解を修正しようと気を配っているように思われた。「ねえ君、彼はまったくばかげた人間だったよ。」<sup>51)</sup>

このように、ハロッドは、マーシャルに対するケインズのネガティブな見方を、単にその学説だけでなく、人物としての面についても披露しているのである。

## 5. ケインズ理論の理解のために

[5.1] “In the long run we are all dead.” - ケインズ理論の理解との関連で -

ケインズというと『一般理論』であるが、『ケインズ全集』の刊行で明らかになっているように<sup>52)</sup>、両大戦間を跨ぐイギリス経済の諸問題とくに対外金融

---

51) 前掲書, p.138.

52) 『ケインズ全集』は、イギリス Royal Economic Society が、その運営に secretary として永年に亘り、尽力したケインズの功績を称え、その没後 30 年の記念として、その業績を可能な限り多く収めて出版することを企図したものである。1954 年から Royal Economic Society の支援の下、編纂作業が始まり、当初、Elizabeth Johnson が担当し、1969 年から Donald Moggridge が編纂に加わった。1977 年以降は Moggridge と Austin Robinson が共同編纂に当たって、刊行されたのが、*The Collected Writings of John Maynard Keynes* である。1971 年から刊行が開始され、本編である第 29 巻までは 1983 年までに刊行されて、文献目録・索引の第 30 巻が 1989 年に刊行されて完了した。2012 年現在、hardcover は絶版で、Paperback 版が 2012 年 11 月に刊行された。『全集』の全巻の序文 (General Introduction) には、刊行までの経緯が詳しく書かれているが、その内容は、出版著作 (8 冊)、論文・パンフレットの論文集 (*Essays in Persuasion, Essays in biography*)、出版されてはいないが収集されていない著作 (新聞に書いた論文、新聞への書簡、の論文集に掲載されなかった雑誌論文と種々のパンフレット)、未出版の著作、経済学者との書簡および経済学または公務に関する書簡、に整理されている。当初全 24 巻の刊行予定 (1971 年の Vol. 1 の General Introduction には全 21 巻の予定とあるが、カバー裏表紙のリストは全 24 巻となっている。同年の Vol. 2 では序文でも全 24 巻と記述) であったが、徐々に増加し (General Introduction の当該記載が後半の刊行にしたがって増加)、1972 年には全 25 巻に、1977 年には全 29 巻、1980 年には全 30 巻の刊行予定となった。の第 1~6 巻は 1971 年に、第 7・8 巻は 1973 年に刊行され、の第 9・10 巻は増補の上 1972 年に刊行され (第 9 巻『説得論集』には 1931 年版に *Means to prosperity* (「繁栄への道」1933) と *How to pay for the war* (「戦費調達論」1940) の小論が増補された。『人物評伝』の補遺については先の脚注 1 に記載した通り)、その後逐次刊行された。当初計画に最終版の第 28 巻が最初に追加され、当初計画の第 22 巻が 2 分冊に、当初計画の第 23 巻が最終版の第 25~27 巻になり、第 24 巻が再整理で追加され、さらに第 29 巻は第 13・14 巻の追補である)。当初計画では第 15~18 巻は Johnson が、第 13・14 巻と第 19 巻以降は Moggridge が編集担当である。第 15~27 巻は年代毎の Activities である。第 19 巻は 2 分冊となったので、全 30 巻・全 31 冊となっている。『全集』の構成は付表参照。

・国際金融問題に対して種々の発言・理論展開を行なったことでも知られる。その著書の1つに1923年の『貨幣改革論』*A Tract on Monetary Reform*がある。この書物自体は第1次大戦後の金本位制への復帰をめぐる幣制問題を論じたものである。この書物の一節に、“In the long run we are all dead.”という文言がある。ケインズの言説の中で最も有名なものともいわれるもので、貨幣数量説のコンテキストで書かれたものである<sup>53)</sup>。無論、貨幣数量説の理解として整理すべきであるが、実はケインズの理論体系と関わらせると重要な示唆を持つ。

この文言を「結局は、われわれは皆死んでしまう」と訳せば、至極当然のことを意味するに過ぎない。しかし「長期的にみると、われわれは皆死んでしまう」(下線部：筆者)と訳すと、ケインズ理論の解釈に役に立つ。ケインズはこの文言の後に、「嵐の最中であって経済学者の言えることが、ただ嵐がすぎれば波はまた静まるであろう、ということだけならば、彼らの仕事は他愛なく無用である」と続ける<sup>54)</sup>。ケインズの関心は「嵐の最中に」あることだとする

53) 吉川 [1995] は、『貨幣改革論』の貨幣数量説の説明の中で、「リカード以来の貨幣数量説を論じたこの件で、ケインズの数多い警句の中でもひととき知られた次の警句が登場する。」としてこの文言を紹介し、「このようにケインズは、リカード、フィッシャーによって強調された貨幣数量説の単純な結論、すなわち「貨幣数量の変化は比例的に物価を変える」という命題の有用性は、きわめて限られたものだと考えた。」(pp. 91-92)とした。また、吉川 [2009] では「貨幣数量説によれば物価は貨幣数量に比例する。マネー・サプライが2倍になれば物価も2倍になる。たしかに「長期的 (in the long run)」にはこのことは正しいかもしれない。」(p. 76)と書いた後、この一説を引用して、「有名なフレーズである。ケインズの死後、ピグーはその追悼論文のなかで次のように書いた。〔ケインズは自分の経済学とマーシャルの新古典派経済学との違いをことさらに強調したが、両者は矛盾するものではない。ケインズは海原に生じる波を分析したのに対して、マーシャルは潮の満干が従う原理を明らかにした。マーシャルが明らかにした原理がより基本的なものではあるが、嵐の時代にはたしかにケインズのような分析もまた必要であった。(Pigou, A. G., “John Maynard Keynes,” *Proceeding of the British Academy*, June 1946, p. 407)〕ここでピグーの念頭にあったのは、『貨幣改革論』のこの一節であったに違いない。マーシャルの祖述から始めたケインズは、こうして単純な貨幣数量説から訣別する。」(pp. 76-77)としている。

根井 [2007] は、「マーシャルを含めて、ケンブリッジ学派の人々(とくに、ケインズ)は、「長期的には」正しいというだけでは、経済現象を正確に理解するには程遠いと考えていた。師よりも意表をつく文才に恵まれていたケインズは、それゆえ、次のような有名な文章を書いたのである。」(p. 27)として、この文言を引用している。

54) 原文は、“Now ‘in the long run’ this is probably true……. But this *long run* is a misleading guide to current affairs. *In the long run* we are all dead. Economists set themselves too easy, too useless a task if in tempestuous seasons they can only tell us that when the storm is long past the ocean is flat again.” (*Collected Writings* Vol. IV, p. 65)であり、邦訳は、「さて、「長期的には」、おそらくこれ(貨幣数量説：筆者記)が正しいであろう。……(中略)……この長期的視

と、ケインズ理論は「長期か、短期か」という区分では「短期」理論である<sup>55)</sup>。

したがって、この文言を単純化して理解すれば、ケインズ解釈として、長期理論としては古典派理論を否定してはいないと理解できる。

## [52] ケインズ『一般理論』の最終章

ケインズは『一般理論』の第6編「一般理論の示唆する若干の覚書」で景気循環、重商主義、高利禁止法、スタンプ付き貨幣、過少消費説などを考察した後、最終章（第24章）「一般理論の導く社会哲学に関する結論的覚書」において、いくつかの興味深い指摘をしている。消費性向や利子率、資本の限界効率などの整理をして「ほかの点においては、上述の理論はその含意において適度に保守的である。」<sup>56)</sup>と書き、

---

点は、現在の事柄については誤謬を生じやすい。長期的にみると、われわれはみな死んでしまう。嵐の最中であって、経済学者に言えることが、ただ、嵐が遠くすぐ去れば波はまた静まるであろう、というだけならば、彼らの仕事は他愛なく無用である。」となっている。

この文言を用いて、クルーグマン (Krugman, P.) は自分が FRB 議長であったときにパブルを見ようとせず何もしなかったのに、その後の米国の金融危機に対して淡々と評価をしたグリーンスパン (Greenspan, A.) の姿勢を批判した。ある訳文として、「長期では（なんとかなるさ）、って考え方では、今どうすりゃいいの、ってことはうまくいかなくなりがち。長期では、みんなくたばっちゃうんだ。大荒れの時期に、嵐がどっかに行けばまた静かな海が戻ってくるさ、ってことしか言えいなら、経済学者ってずいぶんとお気楽で、役立たずな連中なんだって自分自身を貶めちゃってるよね。」というものもある。

また、伊藤 [2006] は、この点について「これはしばしば正統派に対してケインズの特徴を表すフレーズとして引き合いに出される一説であるが、1923年という、ケインズが紛れもない正統派であった頃の発言である。……マーシャルの特徴としては、事実認識においては我々の世界に生きているということを十分に自覚していたが、その一方、科学的命題としては依然、長期の帰結を重視したこともまた事実である。これは、マーシャルの古典派への忠誠と現実認識との間の葛藤として捉えられる。ケンブリッジ学派の思想に内在する一種の矛盾・対抗意識がここでも顔をのぞかせている。」(pp. 183~184) と書いている。

55) ケインズ以前に主流であった古典派の経済学では、セイの法則 (Say's Law) を中心として自由放任主義を展開していた。セイの法則は「供給は需要を生む」と要約される理論で、どのような供給規模であっても価格が柔軟に変動するなら、かならず需給は一致しすべてが需要される（販路法則）という考え方に立つ。経済は突きつめればすべては物々交換であり、貨幣はその仲介のために仮の穴埋めをしているにすぎない（ヴェール）。それゆえ追加的な生産物のみが新たな交換と支払い（需要）をうみ出す事が出来る、とする。ピグーら新古典派経済学は、このような均衡は財の価格が十分に調整しうるほどの長期において成立すると解釈する。一方、ケインズは「長期的にはわれわれはすべて死んでいる (In the long run we are all dead.)」と呼び、このような長期的均衡は実現しないと批判した、とする論もある。

56) Keynes [1936] p. 377, 塩野谷九十九訳 [1941] p. 429. *Collected Writings* Vol. VII, p. 377, 塩野谷祐一訳 [1983] p. 380. 原文は, "Our criticism of the accepted classical theory of econom-

「一般に受け入れられている古典派経済理論に対するわれわれの批判は、その分析における論理的な欠陥を見出すことではなく、その暗黙の想定がほとんどあるいはまったく満たされていないために、古典派理論は現実世界の経済問題を解決することができないということを指摘することであった。しかし、もしわれわれの中央統制によって、できるかぎり完全雇用に近い状態に対応する総産出量を実現することに成功するなら、古典派理論はその点以後再びその本領を発揮するようになる。」<sup>57)</sup>

としている。文字通り解釈すれば、完全雇用が達成されれば、古典派理論が成立し、産出量が所与で、生産要素の結合や分配の問題などについての「古典派の分析に対しては、異議を唱えるべきことはない。また、もしわれわれが倏約の問題を違った仕方について処理しておくなら、完全競争および不完全競争のそれぞれの状態における個人の利益と公共の利益の間の一致・不一致に関する現代古典派理論に対しても、異議を唱えるべきことはない。」<sup>58)</sup>のである。このように、完全雇用が達成され、失業問題が無く、産出量が所与される状況では - それを長期というならば - , 古典派理論の妥当性があると理解できるのである。

これに関連して、根井 [2007] は、シュンペーターがケインズ『一般理論』についてその書評の中で「『一般理論』がマーシャルの意味での「短期」(人口・技術・資本設備が所与であること)を想定している以上、ケインズの「新理論」は、企業者によるイノベーションの遂行によって生産関数が絶えず刷新さ

---

ics has consisted not so much in finding logical flaws in its analysis as in pointing out that its tacit assumptions are seldom or never satisfied, with the result that it cannot solve the economic problems of the actual world. But if our central control succeed in establishing an aggregate volume of output corresponding to full employment as nearly as is practicable, the classical theory comes into its own again from this point onwards.”

57) Keynes [1936] p. 378, 塩野谷九十九訳 [1941] p. 430. *Collected Writings* Vol. VII, p. 378, 塩野谷祐一訳[1983]p.381.

58) Keynes [1936] p. 379, 塩野谷九十九訳 [1941] p. 430. *Collected Writings* Vol. VII, p. 379, 塩野谷祐一訳 [1983] p. 381. 原文は以下の通り。“If we suppose the volume of output to be given, i.e. to be determined by forces outside the classical scheme of thought, then there is no objection to be raised against the classical analysis of the manner in which private self-interest will determine what in particular is produced, in what proportions the factors of production will be combined to produce it, and how the value of the final product will be distributed between them. Again, if we have dealt otherwise with the problem of thrift, there is no objection to be raised against the modern classical theory as to the degree of consilience between private and public advantage in conditions of perfect and imperfect competition respectively.”

れてきた資本主義経済の歴史とかけ離れた「机上の空論」だということである。<sup>59)</sup>として、「ケインズの『一般理論』が「短期の想定」を置いてきたのは確かであり、「創造的破壊」の過程としての資本主義観をもっていたのも十分に理解することができる。だが、『一般理論』ばかりでなく、ケインズの仕事全体を展望すると、彼が「長期」や「供給」の諸問題に関心がなかったというのは的外れであることがわかる<sup>60)</sup>と書いて、ケインズが単に短期の理論を想定していたのではないとしている<sup>61)</sup>。

ケインズ『一般理論』はクローズド・システムで書かれているが、最終章では、それまで重商主義と国際金本位制に関してのみ論じていた国際経済体制について、

「経済学者たちは現行の国際経済体制を、国際分業の利益をもたらすと同時に異なった国々の利益を調和させるものとして、賞賛するのを常としていた……(中略)……しかし、もし諸国民が国内政策によって完全雇用を実現できるようになるならば、一国の利益が隣国の不利益になると考えられるような重要な経済諸力は必ずしも存在しないのである。適当な条件のもとで国際分業や国際貸付が行われる余地は依然としてある。」<sup>62)</sup>

59) 根井 [2007] pp. v~vi.

60) 前掲書, pp. 148~149.

61) 根井 [2007] は、「投資は、「短期」的には有効需要の一要素だが、「長期」的には供給力の拡大につながる。だが、産業競争力の強化のためには、その投資は真の意味での「革新投資」でなければならない。このように考えていくと、最近、吉川洋が平成不況から抜け出すために主張してきた「需要とイノベーションの好循環」というアイデアが重要な意味を帯びてくるように思える。」(p. 51) と吉川 [2003] を評価し、「ケインズとシュンペーターの「総合」を目指す吉川の主張は、「短期では需要」「長期では供給」という伝統的な2分法を打破しようとしている点において、きわめて評価してよい試みといえるだろう。」(p. 153) としている。

62) Keynes [1936] p. 382, 塩野谷九十九訳 [1941] pp. 433~434. *Collected Writings* Vol. VII, p. 382, 塩野谷祐一訳 [1983] pp. 384~385. 山形訳では「でも各国が自国政策によって自国に完全雇用を実現できることを学習すればまる国の利益を隣国の利益と相反させるように計算された、大きな経済的な力は存在しなくてすみます。適切な状況下では、国際分業の余地もあるし、国際融資の余地も残されています。(山形 [2012] p. 506) 原文は以下の通り。"Thus, whilst economists were accustomed to applaud the prevailing international system as furnishing the fruits of the international division of labour and harmonising at the same time the interests of different nations, there lay concealed a less benign influence; and those statesmen were moved by common sense and a correct apprehension of the true course of events, who believed that if a rich, old country were to neglect the struggle for markets its prosperity would droop and fail. But if nations can learn to provide themselves with full employment by their domestic policy (and, we



と書いて、各国が完全雇用を達成すれば、  
「自国商品を他国に強制したり、……外国市場に対して販売を強行しながら、  
購入を制限することによって国内の雇用を維持し……失業問題を競争に敗れた  
隣国に転嫁するにすぎない」状況はなくなり、「相互利益の条件のもとで喜んで  
行われる財貨およびサービスの自由な交換となるであろう。」<sup>63)</sup>  
と指摘して、貿易利益・自由貿易・国際分業を主張する古典派の分析が妥当す  
るとしたのである。

[53] ケインズの最後の論文 “The Balance Payments of the United States”  
(1946)

この点に関連して、死後発表された最後の論文「アメリカの国際収支」<sup>64)</sup>に  
は興味深い指摘がある。論文自体はアメリカの国際収支について論じたもので、  
アメリカの「債権国としての地位が大部分の人々が恐れているほど圧倒的なも  
のにはならないだろうという楽観的な見解をとった」<sup>65)</sup>などの分析である。そ

---

must add, if they can also attain equilibrium in the trend of their population), there need be no important economic forces calculated to set the interest of one country against that of its neighbours. There would still be room for the international division of labour and for international lending in appropriate conditions.”

63) Keynes [1936] p. 382, 塩野谷九十九訳 [1941] pp. 433~434. *Collected Writings* Vol. VII, pp. 382~383, 塩野谷祐一訳 [1983] p. 385. 間宮訳では「今日、国際貿易は外国市場で販売を強い購入を制限することによって国内の完全雇用を維持するための捨て鉢の手段となっているが、たとえそれが奏功したとしても、それはただ失業問題を競争に敗れた隣国に転嫁するだけである。だがそれも終わりである。外国貿易は自発的でなんの妨げもない、相互利益を旨とする財・サービスの交換となるであろう。」(間宮 [2008] 下巻, p. 193) 山形訳では「今の国際貿易では、序国の雇用を維持するために、外国市場に売り上げを強制し、外国からの購入は制限するというものです。これは成功しても、失業問題を闘争に負けた近隣国に移行させるだけです。でもそれがなくなり、相互に利益のある条件で、自発的で何の妨害もない財とサービスの交換が行われるようになるのです。」(山形 [2012] p. 507) 原文は以下の通り。“The authoritarian state systems of today seem to solve the problem of unemployment at the expense of efficiency and of freedom. It is certain that the world will not much longer tolerate the unemployment which, apart from brief intervals of excitement, is associated and in my opinion, inevitably associated with present-day capitalistic individualism. But it may be possible by a right analysis of the problem to cure the disease whilst preserving efficiency and freedom.”

64) ハロッドは、「最後の原稿が私の手元に届いたのは、彼の死後2日を過ぎてからであって、封筒の表書きは彼自身の筆跡であった。この論文名は、彼の最後に発表された論作であるということを離れて、特殊な意味を持っている」と書いている (Harrod [1951]・塩野谷九十九訳『ケインズ伝(下巻)』[1967] p. 680)。

65) Harrod [1951]・塩野谷九十九訳『ケインズ伝(下巻)』[1967] p. 680。

の最後の部分に、輸入関税や輸出補助金などの国際収支の均衡策をめぐる議論がある。その中で、

「長期的には、より基礎的な諸力が作用して均衡に向かうかもしれない。……（中略）……私は現代の経済学者達に、古典派の教えがいくつかの非常に重要な恒久的真理 - われわれは今日、それらを多くの制約条件を付けることなしには受け入れることのできない他の原理と関係付けるがゆえに、それを見落としがちである - を具現しているということを想起させようと、一度ならず働きかけている。これらのことがらにおいては、均衡に向かって働いている自然の力と呼んでもよいもの、あるいは見えざる手とさえいってよいものが底流で作用している。」<sup>66)</sup>

という記載がある。さらに、続けて、

「誤解しないでいただきたいのだが、私は、古典派的な薬がそれだけで作用するとか、あるいはわれわれはそれに頼ることができると考えているわけではない。われわれはより即効性があり、痛みが少ない助力を必要としており、なかでも為替レートの変更と総合的な輸入管理は最も重要なものである。しかし、長期的にはこれらの手段はよりよく作用するであろうし、もし古典派的な薬も作用するのであれば、われわれはそれらをより少なくしか必要としないである

---

66) Keynes [1946] p. 185, *Collected Writings* Vol. XXVII, p. 444, 『全集第 27 巻』平井・立脇訳 [1996] p. 506。この引用部分について、ハロッドは『ケインズ伝』の中で、「いまひとつ興味ある点は彼が永遠の真理に対する信仰を再確認していることである」と述べている (Harrod [1951]・塩野谷九十九訳『ケインズ伝(下巻)』[1967] p. 681)。原文は以下の通り。

“In the long run more fundamental forces may be at work, if all goes well, tending towards equilibrium, the significance of which may ultimately transcend ephemeral statistics. I find myself moved, not for the first time, to remind contemporary economists that the classical teaching embodied some permanent truths of great significance, which we are liable today to overlook because we associate them with other doctrines which we cannot now accept without much qualification. There are in these matters deep undercurrents at work, natural forces, one can call them, or even the invisible hand, which are operating towards equilibrium. If it were not so, we could not have got on even so well as we have for many decades past. The United States is becoming a high-living, high-cost country beyond any previous experience. Unless their internal, as well as their external, economic life is to become paralysed by the Midas touch, they will discover ways of life which, compared with the ways of the less fortunate regions of the world, must tend towards, and not away from, external equilibrium. (Keynes [1946] p. 185)

この “In the long run” と [5.1] の『貨幣改革論』(1923 年)の “In the long run” を対比させると、ケインズは「長期的には」古典派理論にシンパシーを持っていたと考えられるというのが筆者のスタンスである。

う。……（中略）……私が「アダム・スミスの英知を打破するのではなく補足するために、われわれが現代の経験と現代の分析から学んだものを用いようとする試みが、ここにはある」と主張したのは、この理由による。<sup>67)</sup>

と記載されている<sup>68)</sup>。すなわち、長期的には「アダム・スミスの英知」を否定できず、古典派理論がその処を得るに到るとしているのである。換言すると、ケインズの『一般理論』は短期理論で、長期的なコンテキストでは古典派の教義すなわち市場メカニズムの有効性を重視していたものと理解できよう。

また、ケインズ研究者として著名な早坂忠は、その著『ケインズ』の中で、『一般理論』の意義を、  
「『一般理論』の基本線は、多くの単純化の仮定の上に組み立てられている。供給面には何の制約もないと考えられていること。きわめて短期の理論として構想され、したがって投資も所得の大きさとは無関係な独立投資のみが考察されて、所得に依存する誘発投資は無視されており、また投資の果たす役割も、乗数過程による所得造出効果のみが考えられて、投資の生む新設備によって生産力が高まるという、投資の生産力効果は、考察外におかれていること。時差の問題が明示的に取りあげられていないために、乗数効果等の一切の調整過程が、少なくとも形式上は、一瞬間のうちに実現するような形になっていること。きわめて簡単な形の消費関数が想定されていること」<sup>69)</sup>

---

67) Keynes [1946] p. 186, *Collected Writings* Vol. XXVII, p. 445, 『全集第 27 巻』平井・立脇訳 [1996] p. 507。原文は以下の通り。

“I must not be misunderstood. I do not suppose that the classical medicine will work by itself or that we can depend on it. We need quicker and less painful aids of which exchange variation and overall import control are the most important. But in the long run these expedients will work better and we shall need them less, if the classical medicine is also at work. And if we reject the medicine from our systems altogether, we may just drift on from expedient to expedient and never get really fit again. The great virtue of the Bretton Woods and Washington proposals, taken in conjunction, is that they marry the use of the necessary expedients to the wholesome long-run doctrine. It is for this reason that, speaking in the House of Lords, I claimed that ” Here is an attempt to use what we have learnt from modern experience and modern analysis, not to defeat, but to implement the wisdom of Adam Smith.” ”(Keynes [1946] p. 186)

68) このコンテキストでの、ケインズの為替理論については、村本 [1985]「補論」でその関連など論じた。とくに、pp. 154~155 参照。吉野 [1955] は、古典派の薬としての価格機構が国際均衡化の手段としては、短期的には限界を有するが、長期的には有効であり、したがって短期的には安定的な為替相場の保持と長期的には伸縮的な為替相場の調整作用を利用する工夫がケインズの論理である、と指摘した (pp. 177~178)。

69) 早坂 [1969] pp. 150~151。

と述べた上で、

「これまであげた点以外にも、『一般理論』にはもう一つの著しい単純化がある。外国貿易が捨象されていることである。……しかし、それまでのケインズが経済問題の国際面に大きな注意を払ってきたことを考えると、これには何かもう少し理由がなければならない。……しかし、国際関係がなくなってしまうかぎり、各国がそれらの国内政策をとりうるためにも、国内政策にあまり影響を与えぬ形の、国際的取引や決済のための何らかの適当な機構が必要である。……だが、極度に混乱した当時の国際経済を前にして、『一般理論』のケインズは、外国との関係に依存しない、国内面での完全雇用政策の必要を説くのである。」<sup>70)</sup>

として、ケインズが『一般理論』の段階では、クローズド・モデルで考察した点を明瞭にしている。

このように、『一般理論』が対外関係を捨象したクローズド・モデルと理解すると、対外関係・国際貿易を考慮すると如何なる理論構成になるのであろうか。端的には、古典派ないしアダム・スミスに回帰するとも理解できるともいえるのだが<sup>71)</sup>、この点についてハロッドは『ケインズ伝』で次のように書いている。

「ある程度の自給自足の意味するケインズ経済学における国家主義的な実験に満足している必要はなく、世界的規模におけるケインズ経済学実験のよりよい道を選び、国際貿易から生まれる完全な利益を捨てないようにすることができる。彼の心はいまやアダム・スミスに帰り、彼が説いた偉大な真理に戻った。もちろんそれらは真理であった。しかし彼にとっては、それらは近年大量な失業および経済不況という緊急な問題と思われる事態のために、隠れた問題とな

70) 前掲書 pp. 151~152。

71) 根井 [2006] は、「通説によれば、ケインズ経済学は「短期」理論で、シュンペーターが強調したようなイノベーションは「長期」の問題と考えられる（換言すれば、「短期」では需要面が、「長期」では供給面が重要であるということである。）」（p. 70）と書き、「ケインズが T. W. ハチソンも指摘しているように、公共投資政策を、摩擦的・季節的失業や循環的失業に対する政策ではなく、「長期的」または「構造的」失業に対する対策として提唱したことである。……それゆえ、ケインズの『一般理論』の雇用理論として読み直すイートウェルやミルゲイトの試みがいっそう注目されるのである。」（pp. 68~69）として、『一般理論』を長期の雇用理論として読み直す必要性を論じている。（T. W. ハチソン著『近代経済学史』山田雄三ほか訳、東洋経済新報社、1957年、下巻、pp. 186~187。J. イートウェル & M. ミルゲイト著『ケインズの経済学と価値・分配の理論』序文、石橋太郎ほか訳、日本経済評論社、1989年、p. 12）。

っていたのである。アダム・スミスの現代における追隨者たちがこれらの新しい問題を承認することを拒否するかぎり、彼は彼らの福音を説こうとは思わない。しかも彼としてはその福音を説いているほうがいっそう幸福である。」<sup>72)</sup>

極めて単純化すれば、失業問題が克服された長期的視点と国際貿易を導入したオープン・モデルでは古典派理論の適用が可能とケインズが主張しているものと理解できるのである。この意味で、マーシャルへのシンパシーがあったともいえよう<sup>73)</sup>。

市場メカニズムは経済学あるいは経済システムの究極の解である。しかし、ケインズの言うように補完する仕組み、補完するシステムがないと機能不全に陥ることもあるのである。重要なことはケインズが主張するように長期的な視点、あるいはシュンペーターが1912年の『経済発展の理論』で指摘していたように動態的な捉え方に対して、静学的なマーシャル経済学という整理になるかもしれない。

## 6. おわりに

マーシャルの“Cool heads but warm hearts.”は、経済学のみならず社会科学、否、科学に関わる者にとって須らく心すべき言葉である。本稿では、マーシャルの事蹟・理論を追うことよりも、この言葉をめぐる種々の論者の見解と、その弟子であるケインズとの関係などに絞った記述になったが、ケインズの国際通貨論からスタートした筆者の研究にとっては相応の想いがある。とくに、ケインズが、何故“In the long run we are all dead.”と書き、またハロッドが『ケインズ伝』で「彼（ケインズ：筆者記）の心はいまやアダム・スミスに帰り、彼が説いた偉大な真理に戻った」とか、「いまひとつ興味ある点は彼が永遠の真理に対する信仰を再確認していることである」<sup>74)</sup>と書いたことの意味を再確認することが、『一般理論』を超えたケインズの理論の解釈として重要であろう。すなわち、ケインズの長期理論とは何だったのか、封鎖体系ではなく開放体系（オープン・エコノミー）としての解釈は如何なるものか、という点であ

72) Harrod [1951], 塩野谷訳『ケインズ伝（下巻）』[1967] p. 668。

73) このケインズ解釈をめぐる問題は、筆者の修士論文「ケインズ国際通貨論研究」以来の問題意識である。

74) Harrod [1951], 塩野谷訳『ケインズ伝（下巻）』[1967] p. 681。

る。この点に関しての理論的な深掘りは必ずしも充分でないように思われる。

「書物は著者の手をはなれると、独自の生命をもつといわれる。」<sup>75)</sup> が、碩学・賢者の言葉も同様に独自の生命を持ち、読み手に夫々の印象と解釈を与えるものなのであろう。

( 付表 ) *The Collected Writings of John Maynard Keynes* の構成

Volume	末尾の数字は刊行年。第 1 ～ 10 巻は初版の刊行年と括弧に『全集』の刊行年。	邦訳
1	Indian Currency and Finance, 1913 (1971)	有
2	The Economic Consequences of the Peace, 1919 (1971)	有
3	A Revision of the Treaty, 1922 (1971)	有
4	A Tract on Monetary Reform, 1923 (1971)	有
5	A Treatise on Money 1: the Pure Theory of Money, 1930 (1971)	有
6	A Treatise on Money 2: the Applied Theory of Money, 1930 (1971)	有
7	The General Theory, 1936 (1973)	有
8	Treatise on Probability, 1921 (1973)	有
9	Essays in Persuasion, 1931 (1972)	有
10	Essays in Biography, 1933 (1972)	
11	Economic Articles and Correspondence: Academic, 1983	
12	Economic Articles and Correspondence: Investment and Editorial, 1983	
13	The General Theory and After, Part 1: Preparation, 1973	
14	The General Theory and After, Part 2: Defence and Development, 1973	
15	Activities 1906 - 1914: India and Cambridge, 1971	有
16	Activities 1914 - 1919: The Treasury and Versailles, 1971	
17	Activities 1920 - 1922: Treaty Revision and Reconstruction, 1977	
18	Activities 1922 - 1932: The End of Reparations, 1978	有
19	Activities 1922 - 1929: The Return to Gold and Industrial Policy, Part I & II, 1981 (2vols.)	( 有 1 冊 )
20	Activities 1929 - 1931: Rethinking Employment and Unemployment Policies, 1981	
21	Activities 1931 - 1939: World Crises and Policies in Britain and America, 1982	
22	Activities 1939 - 1945: Internal War Finance, 1978	
23	Activities 1940 - 1943: External War Finance, 1979	
24	Activities 1944 - 1946: The Transition to Peace, 1979	有
25	Activities 1940 - 1944: Shaping the Post-War World: The Clearing Union, 1980	有
26	Activities 1941 - 1946: Shaping the Post-War World: Bretton Woods and Reparations, 1980	有
27	Activities 1940 - 1946: Shaping the Post-War World: Employment and Commodities, 1980	有
28	Social, Political and Literary Writings, 1982	有
29	The General Theory and After: A Supplement, 1979	
30	Bibliography and Index, 1989	
は当初計画から拡充された巻, は追加された巻。 邦訳は, 2013 年末現在の状況。		

75) 中山伊知郎『マースシャル経済学原理』はしがき(馬場訳 [1965] p.v)

“Cool heads but warm hearts.”

〔参考文献〕

Déavadhar, Y. C., “Alfred Marshall on Cooperation,” *Annals of Public and Cooperative Economics*, Vol. 42 Issue 4, Oct. 1971, pp. 285~301.

Elliot, J., “Alfred Marshall on socialism (The Social Economics of Alfred Marshall),” *Review of Social Economy*, Vol. 48 No. 4, Dec. 1990, pp. 450~476.

([www.accessmylibrary.com/article-1G1-10545012/alfred-marshall-socialism-social.html](http://www.accessmylibrary.com/article-1G1-10545012/alfred-marshall-socialism-social.html). 2013年3月10日アクセス)

Harrod, R. F., *The Life of John Maynard Keynes*, Macmillan, 1951. 塩野谷九十九訳『ケインズ伝(上)(下)』東洋経済新報社, 上巻 1967年3月, 下巻 1967年4月。

, *Sociology, Morals and Mystery*, Macmillan, 1971. 清水幾太郎訳『社会科学とは何か』岩波新書, 1975年11月。

Keynes, J. M., *A Tract on Monetary Reform*, Macmillan, 1923. 中内恒夫訳『貨幣改革論』(原書第2版 1924年刊の訳)『世界の名著 57 ケインズ・ハロッド』(宮崎義一・伊東光晴責任編集)に所収, 中央公論社, 1971年7月。The *Collected Writings of John Maynard Keynes* Vol. IV, Macmillan, 1971. 中内恒夫訳『ケインズ全集第4巻 貨幣改革論』東洋経済新報社, 1978年10月。

, *Essays in Biography*, 1933. 熊谷尚夫・大野忠男訳『人物評伝』(1951年版の訳)岩波現代叢書, 1959年7月。The *Collected Writings of John Maynard Keynes* Vol. X, Macmillan, 1973. 『ケインズ全集第10巻 人物評伝』(大野忠男訳), 東洋経済新報社, 1980年1月。

, *The General Theory of Employment, Interest and Money*, Macmillan, 1936. 『雇傭・利子および貨幣の一般理論』塩野谷九十九訳(1936年版の訳), 東洋経済新報社, 1941年12月(第36刷, 1966年11月)。The *Collected Writings of John Maynard Keynes* Vol. VII, Macmillan, 1973. 『ケインズ全集第7巻 雇用・利子および貨幣の一般理論』塩野谷祐一訳, 東洋経済新報社, 1983年12月。間宮陽介訳(上下巻。1936年版第2刷の訳。ただし, 「日本語版への序」の訳文はない), 岩波文庫 上巻 2008年1月, 下巻 2008年3月。山形浩生訳(タイトルは『雇用, 利子, お金の一般理論』, 基本的には1936年版(HBJ版のペーパーバック(1953))の訳で, *Collected Writings* Vol. VIIをもとにした Palgrave Macmillan 版(2007)もチェックしたもの。Palgrave Macmillan 版にある Paul Klugman の Introduction の訳と Hicks, J. R., “Mr. Keynes and the ‘Classics’: A Suggested Interpretation”, *Econometrica*, Vol. 5 Issue 2, April 1937, pp. 147~159. の訳文もある), 講談社学術文庫, 2012年3月。

[http://ebooks.adelaide.edu.au/k/keynes/john\\_maynard/k44g/](http://ebooks.adelaide.edu.au/k/keynes/john_maynard/k44g/) (2013年4月3日アクセス)

<http://ambidextrouscivicdiscourse.com/wp-content/uploads/2010/10/The-General-Theory-of-Employment-Interest-and-Money.pdf> (2013年4月3日アクセス)

, “The Balance of Payments of the United States,” *Economic Journal*, Vol. 56 No. 222, June 1946, p. 172~187. The *Collected Writings of John Maynard Keynes* Vol. XXVII *Activities 1940-1946: Shaping the Post-war World: Employment and Commodities*, Macmillan, 1980, pp. 427~446. 『ケインズ全集第27巻 戦後世界の形成: 雇用と商品 - 1940~46年の諸活動 - 』平井俊顕・立脇和夫訳, 東洋経済新報社, 1996年9月, pp. 489~508。

Marshall, A., *Principles of Economics*, Macmillan, 1890. (Ninth (variorum) edition with annotations

- by C. W. Guillebaud, 2 vols, 1961). 馬場啓之助訳『マーシャル経済学原理(全4巻)』(ギルポー校訂版 Ninth ed. の邦訳), 東洋経済新報社, 第1巻1965年10月, 第2巻1966年3月, 第3巻1966年9月, 第4巻1967年4月。
- “Social Possibilities of Economic Chivalry,” *The Economic Journal*, Vol. 17 No. 65, Mar. 1907, pp. 7~29. (in Pigou, A. C. [1925])
- Pigou, A. C. (ed.), *Memorials of Alfred Marshall*, Macmillan, 1925. 宮島綱男監訳, 實文館, 1928年1月(第1部及び第2部の訳)。永澤越郎訳『マーシャル経済論文集』岩波書店(岩波ブックサービスセンター), 1991年12月(Pigou [1925]では発表年月順に章(論文・講演)が配列されているのに相違し, 問題の性質にしたがって類別し, 配列している)。
- 馬場啓之助『マーシャル 近代経済学の創立者』勁草書房, 1961年10月。
- 橋本昭一「マーシャルと協同組合」『経済学論究(関西学院大学)』第52巻第4号, 1998年4月, pp. 47~64。
- 早坂 忠『ケインズ - 文明の可能性を求めて -』中公新書, 1969年12月。
- 藤田暁男「マーシャル経済学における企業組織と協同組合」『経済と経営(札幌大学)』第21巻第4号, 1991年3月, pp. 159~193 (761~795)。
- 平井俊顕『ケインズの理論 - 複合的視座からの研究 -』東京大学出版会, 2003年1月。
- 伊東光晴『ケインズ - “新しい経済学”の誕生 -』岩波新書, 1962年, 4月。
- 『ケインズ』講談社学術文庫, 1993年, 12月(旧:『人類の知的遺産シリーズ ケインズ』講談社)。
- 『現代に生きるケインズ - モラル・サイエンスとしての経済理論 -』岩波新書, 2006年5月。
- 伊藤宣広『現代経済学の誕生 - ケンブリッジ学派の系譜 -』中公新書, 2006年4月。
- 美濃口武雄「アルフレッド・マーシャルとケンブリッジ学派の経済学」『一橋大学機関リポジトリ』Study Series No. 26, 1992年3月。
- 村本 孜『現代国際通貨論』有斐閣, 1985年2月。
- 「One for all, all for one .」『社会イノベーション研究』第9巻第1号, 2014年3月, pp. 49~91。
- 那須正彦『実務家 ケインズ』中公新書, 1995年7月。
- 『ケインズ研究遍歴』中央公論事業出版, 2012年11月。
- 日本経済新聞社編『現代経済学の巨人たち 20世紀の人・時代・思想』1994年2月(日経ビジネス人文庫, 2001年4月)。
- 編『経済学をつくった巨人たち 先駆者の理論・時代・思想』1995年2月(旧書名『経済学の先駆者たち』), 日経ビジネス人文庫, 2001年7月。
- 編『経済学 名著と現代』日本経済新聞社, 2007年12月。
- 編『経済学の巨人 危機と闘う 達人が読み解く先人の知恵』日経ビジネス人文庫, 2012年12月。
- 西岡幹雄『マーシャル研究』晃洋書房, 1997年12月。
- 西澤 保『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店, 2007年3月。
- 根井雅弘『ケインズから現代へ 20世紀経済学の系譜』日本評論社, 1990年1月。
- 『現代経済学の生誕』名古屋大学出版会, 1992年11月。
- 『経済学の歴史』筑摩書房, 1998年, 講談社学術文庫, 2005年3月。



“Cool heads but warm hearts.”

『物語現代経済学 - 多様な経済思想の世界へ - 』中公新書, 2006 年 7 月。

『ケインズとシュンペーター - 現代経済学への遺産 - 』NTT 出版, 2007 年 10 月。

『経済学はこう考える』ちくまプリマー新書 (筑摩書房), 2009 年 1 月。

斧田好雄「マーシャルの経済騎士道について」『文化紀要』第 5 号, 1971 年, pp. 1~19。

大山 博「福祉と経済思想の関係 - とくに A. マーシャルとボラニーに着目して - 」『現代福祉研究』第 10 号, 2010 年 3 月, pp. 101~133。

櫻井克彦「社会的責任論の源流と A. マーシャルの経済的騎士道」『創価経営論集』第 28 巻第 1・2・3 号合併号, 2004 年 3 月, pp. 15~25。

杉本貴志「経済学者と協同組合 - イギリス, アメリカ, そして日本」

(<http://pws.prserv.net/coop/works/keizaito.htm> 2014 年 3 月 30 日アクセス)

田中 修「世界経済危機を契機に資本主義の多様性を考える (第 1 話) 経済学の諸相 - マーシャルとケンブリッジ学派 - 」『ファイナンス』通巻 529 号, 2009 年 12 月, pp. 76~80。

山本堅一「A. マーシャルの有機的成長論における経済騎士道と生活基準の役割」『経済学研究 (北海道大学)』第 61 巻第 3 号, 2011 年 12 月, pp. 37 (180)~50 (192)。

吉川洋『ケインズ - 時代と経済学 - 』ちくま新書, 1995 年 6 月。

『構造改革と日本経済』岩波書店, 2003 年 10 月。

『いまこそ、ケインズとシュンペーターに学べ - 有効需要とイノベーションの経済学』ダイヤモンド社, 2009 年 2 月。

吉野昌甫「国際均衡化機構とケインズ」小泉明編『経済学説全集 12: 近代経済学の革新』河出書房, 1955 年 7 月。

\* ) 教員特別研究助成「イノベーションの推進における政策と戦略との相互作用に関する総合的研究」の成果の一部である。本稿の基となる研究の初期段階では、吉野 [1955] をはじめとする吉野昌甫先生の著作に啓発されたことを記して、2012 年 9 月 10 日に逝去された御霊に慎んで御礼申し上げたい。